多賀城市文化財調査報告書第４集

市川橋遺跡調査報告書

―昭和57年度発掘調査報告書―

昭和58年3月

多賀城市教育委員会

序

多賀城市の文化財行政は、特別史跡多賀城跡・附寺跡を中心に展開されてきた。しかし、近年宅地造成等の開発が多くなり、市内各所に所在する貴重な文化財の調査・保存は、緊急の課題となってきている。

そのため、本市では昭和47年に教育委員会事務局内に文化財保護係を設置し、53年には多賀城跡に史跡管理事務所を建設し、以来専門職員の配置、係員の増員をはかるとともに、文化財の保護対策と史跡の保存管理をすすめてきた。その間、宮城県立の東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所の指導助言を受けながら、市独自の調査研究をつづけ、少しずつではあるが、年々着実な成果をあげている。

現在、特別史跡指定地は、990,914㎡を有するが、さらに多賀城跡南面地域の約81,000㎡ほどが昭和58年度中に追加指定される見込みである。

この報告書は、昭和57年度事業の概要であり、未完成の部分も多く含まれているが、今後、さらに調査研究を広げてそれを補っていくつもりである。

先輩各位の変わらぬご指導とご助言を切に願うものである。

昭和58年3月

多賀城市教育委員会
教育長　玉　蟲　誼

例　　言

1．本書は、多賀城市教育委員会が、昭和57年度の国庫補助事業として実施した、市川橋遺跡（伏石地区）の第２次調査の結果をとりまとめたものである。

2．本調査は、昭和55年度からの継続事業として「山王遺跡他発掘調査」の名称で行ったものである。遺構確認調査として実施したものであるため、遺構の詳しい記述を避け、出土遺物の紹介に重点を置いた。

3．本書の作製についての作業分担は次のとおりである。

本文執筆　　高倉敏明…Ⅲ，Ⅵ２(1)～(3)，Ⅶ

滝口　卓…Ⅰ，Ⅱ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ２(4)・(5)・(7)～(10)，Ⅶ

石本　敬…Ⅵ１・２(1)～(3)，(6)

遺構・遺物トレース……滝口卓・千葉裕子（遺構），石本　敬（遺物）

遺物実測……石本　敬・千葉裕子・白石直子・中沢真奈美・佐藤　淳・鈴木勝彦・井口祐二・宮崎隆史

遺物復元・拓影……千葉裕子・白石直子・柏倉霜代・須藤美智子・熊谷純子・小野則子・田村ゆかり・榊原浩子・大槻尚子・糸谷明子

遺物写真……高倉敏明

図面整理……石本　敬

遺物整理……阿部米子・鈴木哲子・後藤はつみ・熊谷あつ子・阿部美智子・阿部久子・後藤恵子・高野敏子

遺構写真……滝口　卓・石本　敬

編　　集……高倉敏明

遺物整理については、山王地区公民館の協力を受けた。

4．本調査の基準点設定に当たっては、多賀城南門地区の座標杭を使用した。実測図中の数値については、多賀城政庁跡中軸線からの距離を示す。

本　文　目　次

序
例　言
Ⅰ　調査体制…… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境…… 1
Ⅲ　調査に至る経緯…… 4
Ⅳ　調査方法と経過…… 7
Ⅴ　発見遺構…… 10
(1)　Ⅳ区…… 10
(2)　Ⅴ区…… 11
(3)　Ⅵ区…… 13
Ⅵ　出土遺物…… 17
1　遺構内出土遺物…… 17
(1)　Ⅳ区…… 17
(2)　Ⅴ区…… 19
2　堆積土出土遺物…… 21
(1)　土師器…… 21
(2)　須恵器…… 26
(3)　赤焼き土器…… 32
(4)　陶磁器…… 33
(5)　瓦　…… 34
(6)　硯　…… 40
(7)　砥石…… 40
(8)　土錘…… 40
(9)　古銭…… 42
(10)　鉄製品…… 42
Ⅶ　まとめ…… 42

図　版　目　次

図版１　調査地区航空写真…… 45
図版２　調査地区全景（南東より）…… 45
図版３　調査風景…… 46
図版４　Ⅳ区遺構検出状況（西より）…… 46
図版５　Ⅳ区畦畔遺構…… 47
図版６　Ⅳ区竪穴遺構…… 47
図版７　Ⅳ区１号土壙…… 48
図版８　Ⅴ区遺構検出状況（西側）…… 48
図版９　Ⅴ区遺構検出状況（東側）…… 49
図版10　Ⅴ区畦畔遺構…… 49
図版11　Ⅴ区土壙４～６遺物出土状況…… 50
図版12　Ⅴ区土壙１遺物出土状況…… 50
図版13　Ⅴ・Ⅵ区調査区全景…… 51
図版14　Ⅵ区調査区全景…… 51
図版15　Ⅵ区遺構検出状況…… 52
図版16　Ⅵ区ピット１遺物（古銭）出土状況…… 52
図版17　出土土器…… 53
図版18　出土土器…… 54
図版19　出土瓦…… 55
図版20　出土瓦…… 56
図版21　灰釉・緑釉陶器，白磁…… 57
図版22　硯，砥石，古銭，土錘，鉄鏃…… 58

Ⅰ　調　査　体　制

1．遺跡所在地　多賀城市市川字伏石28－1外

2．調 査 期 間　昭和57年12月17日～昭和58年2月28日

3．調査主体者　多賀城市教育委員会　教育長　玉蟲　　誼

4．調査担当者　多賀城市教育委員会社会教育課文化財保護係

社会教育課長　　戸村　陸男

文化財保護係長　菊池　光信

技師　　高倉　敏明　滝口　　卓

嘱託　　石本　　敬

5．調　査　員　（東北学院大学学生）赤石沢亮、吉田秀亨、中沢真奈美、佐藤　淳、井口祐二、鈴木勝彦、大野　亨、遠藤忠明、鈴木和子、高橋綾子、笹平克子

6．調査協力者　多賀城跡調査研究所、多賀城市中央公民館　（地権者）佐藤忠寿、菊池功

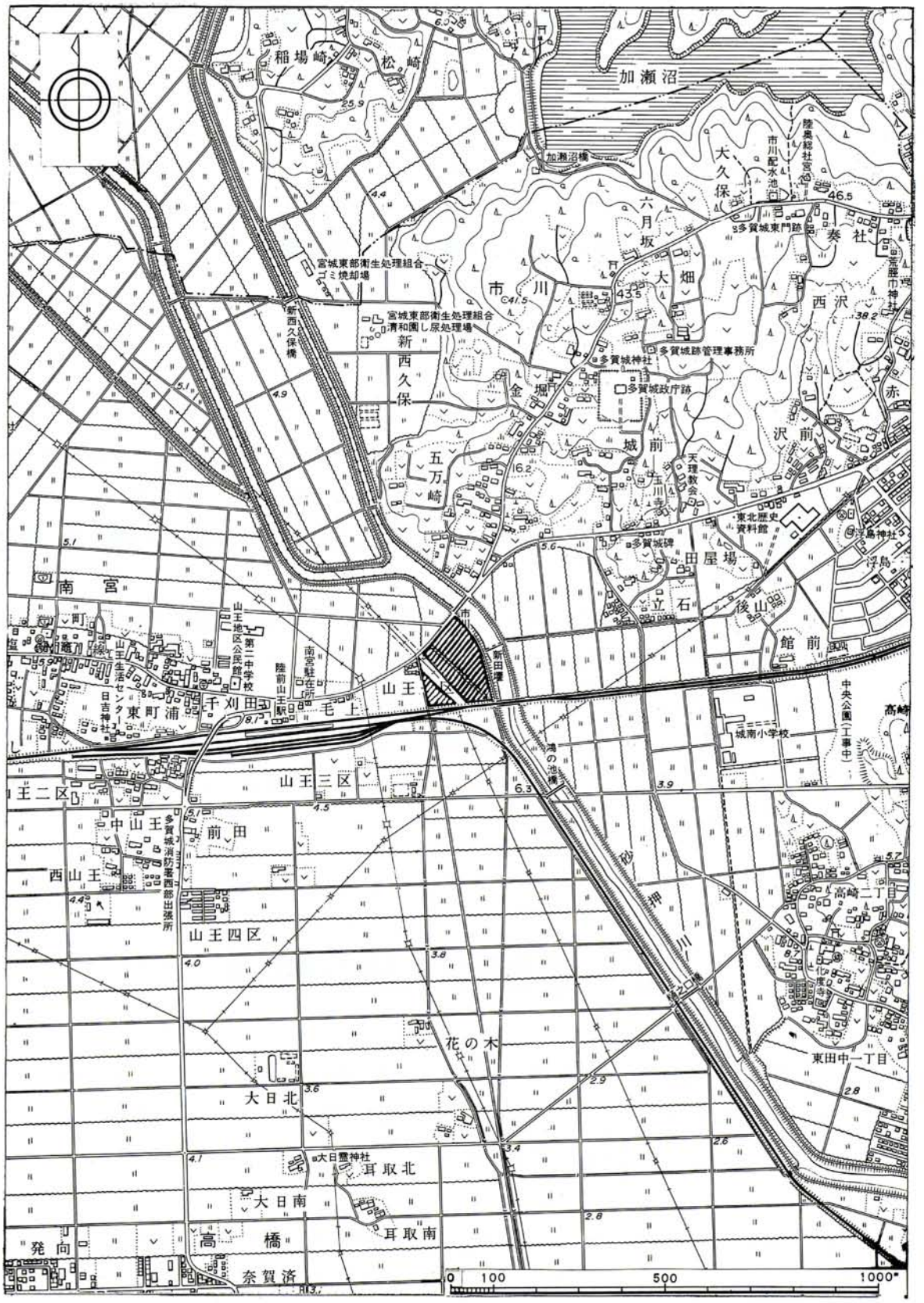
7．調査参加者　伊藤武右エ門、浦山　博、桜井喜作、黒崎庸治、桜井三千夫、渡辺新治下道博信、志賀　孝、佐藤富雄、織田　信、小川庄吉、小川舛雄、菊池　昇、後藤源二郎、阿部　浩、赤間かつ子、阿部米子、阿部久子、阿部美智子、阿部美津子、熊谷あつ子、後藤はつみ、後藤恵子、鈴木哲子、高野敏子、鶴巻まき子、遠藤一代、渡辺園恵、角田静子、鈴木　劭、佐藤たま子、佐藤さき子、菊池よしみ、細川房子、菅原よう子、安斉真奈美、阿部千絵美

Ⅱ　遺跡の立地と環境

市川橋遺跡は、特別史跡多賀城跡の西側から南側一帯の水田部にかけて、東西1km、南北2kmの広範囲に位置し、砂押川が形成した自然堤防上に立地している。遺跡の西側は砂押川が南下し、北側は多賀城跡の指定地域と接している。多賀城跡南辺築地に接する東側の地域では、すでに宅地化されている。

今回の調査は、昨年度からの継続事業として、砂押川西岸の市川字伏石地区の遺構確認調査を実施した。

市川橋遺跡の周辺には、多くの遺跡が所在している。特に、北側丘陵には特別史跡多賀


稲場崎
松崎
加瀬沼
加瀬沼橋
大久保
六月坂
市川配水池
陸奥総社宮
多賀城東門跡
奉社
宮城東部衛生処理組合
ゴミ焼却場
市川
大畑
西沢
宮城東部衛生処理組合
清和園し尿処理場
新西久保橋
新西久保
多賀城神社
多賀城跡管理事務所
多賀城政庁跡
金堀
赤沢前
城前
五万崎
天理教会
玉川寺
東北歴史資料館
多賀城碑
浮島神社
浮島
田屋場
立石
後山
館前
南宮
山王地区公民館
第二中学校
南宮駐在所
陸前山王駅
山王生活センター
日吉神社
東町浦
千刈田
毛上
山王上
新田橋
湾の池橋
城南小学校
中央公園(工事中)
高崎
山王二区
山王三区
中山王
前田
多賀城消防署西部出張所
西山王
山王四区
砂押川
高崎二丁目
花の木
東田中一丁目
大日北
大日霊神社
耳取北
大日南
耳取南
高橋
発向
奈賀済
0
100
500
1000m

第１図　調査区位置図

表1　遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
1	新田遺跡	新田	自然提防	集落跡	古墳・奈良・平安
2	安楽寺遺跡	新田	〃	寺院跡	古代・中世
3	山王遺跡	山王・南宮	〃	集落跡	古墳・奈良・平安
4	大日北遺跡	高橋字大日北	〃	散布地	奈良・平安
5	特別史跡多賀城跡	市川・浮島	丘陵	国府跡	〃
6	西沢遺跡	市川・浮島	〃	散布地	〃
7	法性院遺跡	浮島	丘陵中腹	散布地・寺院跡	〃
8	館前遺跡	浮島	分離丘陵	官衙・館跡	平安・中世
9	市川橋遺跡	市川	沖積平野	集落跡	奈良・平安
10	高平遺跡	浮島・高崎1丁目	〃	〃	〃
11	高崎遺跡	高崎1・2丁目、留ヶ谷1丁目	丘陵	寺院跡・館跡・集落跡	奈良・平安・南北朝
12	特別史跡多賀城廃寺跡	高崎1丁目・2丁目	〃	寺院跡	奈良・平安
13	高崎古墳群	高崎2丁目	丘陵麓	高塚古墳(円)	古墳
14	東田中窪前遺跡	東田中1丁目	〃	散布地・館跡	中世
15	志引遺跡	東田中2丁目	丘陵	〃	奈良・平安・鎌倉
16	稲荷殿古墳	中央3丁目	丘陵(麓)	高塚古墳(円)	古墳(後)
17	桜井館跡	中央1丁目	丘陵	館跡	鎌倉
18	高原遺跡	浮島字高原105	〃	散布地	奈良・平安
19	小沢原遺跡	浮島3丁目	〃	〃	〃
20	野田遺跡	留ヶ谷	〃	散布地・館跡	奈良・平安・中世
21	矢作ヶ館跡	留ヶ谷2丁目	〃	〃	奈良・平安・鎌倉
22	八幡館跡	八幡2丁目	〃	〃	奈良・平安・中世
23	八幡沖遺跡	八幡・宮内1丁目	平地	散布地	奈良・平安
24	東原遺跡	栄3丁目	砂堆	〃	〃

城跡があり、東側の丘陵上には、多賀城の附属寺院である多賀城廃寺がある。この両者のほぼ中間に位置し、本遺跡の北東部に接して館前遺跡が所在している。館前遺跡では、桁行7間、梁行4間の四面廂をもつ建物跡を中心とし、古代の掘立柱建物跡が6棟発見されている。

高崎丘陵には、多賀城廃寺を取り囲むように高崎遺跡が位置している。昭和55・56年に丘陵西端部の調査を実施し、掘立柱建物跡や合口甕棺が発見された。さらに、丘陵南西部の旧表地区においては、昭和57年6月に市営住宅建設に伴う事前調査を実施し、この地区からも甕棺が発見されている。また、高崎遺跡の西側に隣接して、高崎古墳群や、高平遺跡が所在している。高平遺跡からは、古代の建物跡や竪穴式住居跡等が発見されている。

一方、本遺跡西方の山王地区から新田地区一帯は、七北田川によって形成された自然堤防が発達しており、広い範囲にわたって遺跡が所在している。この地区の遺跡は、ここ数年、部分的ではあるが数ケ所において発掘調査が実施され、古墳時代から江戸時代末期ま

での遺構が発見されている。

市川橋遺跡においても、これまでに数ケ所で発掘調査が実施されている。高崎字水入囲地区や、城南小学校西側農道の下水道管理設工事に伴う発掘調査では、水田下40cm程に遺物包含層が認められ、その下面より建物跡や井戸跡などの遺構が発見されている。また、多賀城の南辺築地に近接する市川字館前地区では、掘立柱建物跡、一本柱列、道路状遺構、運河跡、溝跡などが発見されている。

このように、多賀城跡の周辺地域からは、多量の遺物と遺構が発見されているが、多賀城が国府として機能していた奈良～平安時代にかけての遺構は特に多賀城との関連が考えられ、一般の集落遺跡とは、性格が異なるものと思われる。

Ⅲ　調査に至る経緯

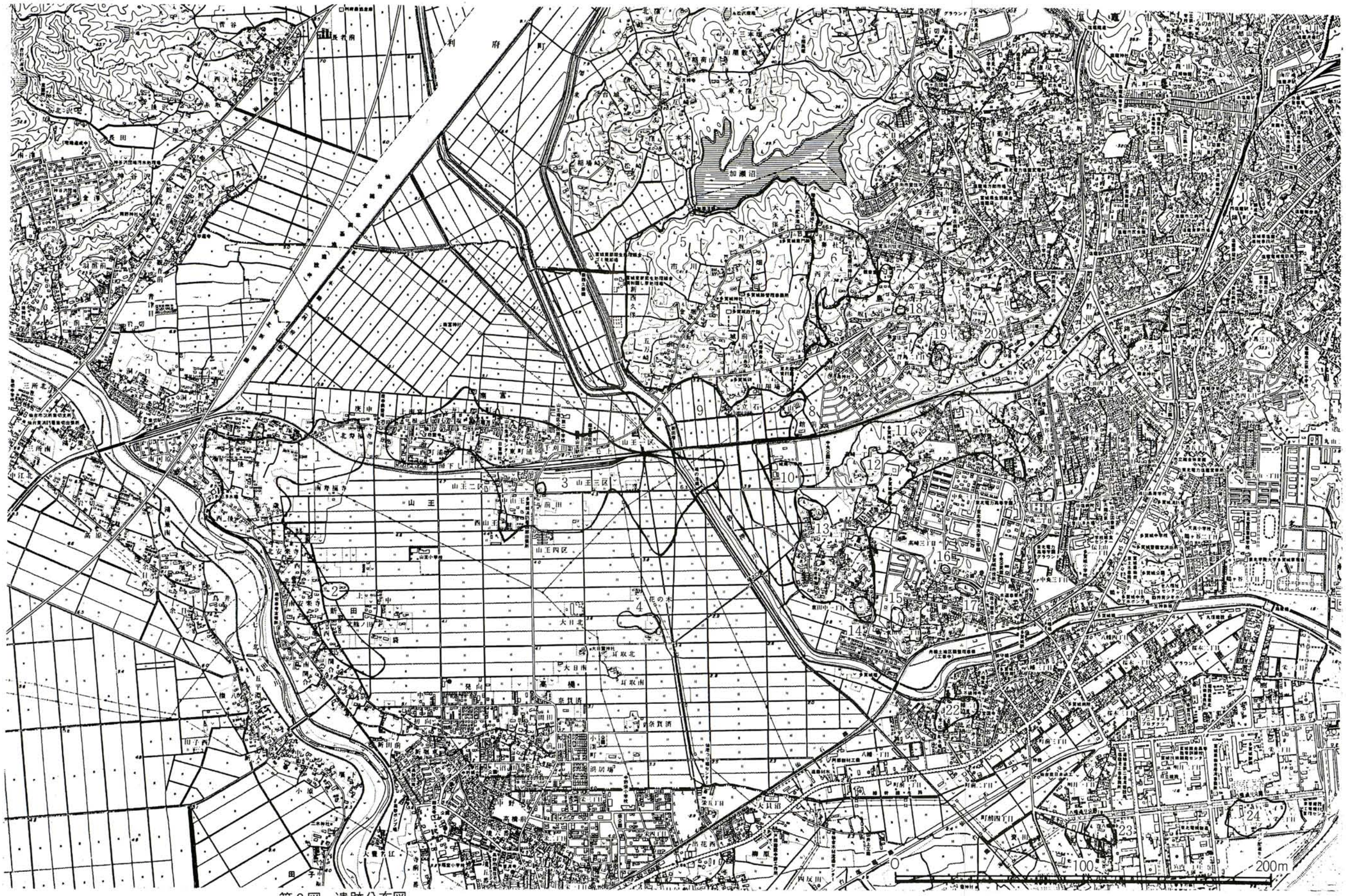
多賀城跡の保存・整備は、国の補助を受けて計画的に実施されている。史跡指定地域は市川地区から浮島地区にわたり、面積およそ93*ha*（廃寺・館前地区は含まない）の広大な範囲をもっている。この指定地域内には、近世以降に営まれた集落が、旧塩釜街道から県道根白石・塩釜線沿線にわたって形成されている。

史跡の保存・管理において市教育委員会は、現在、指定地内に生活基盤をもつ地区民との共存・斉合を図りながら、現状保存を第一義的に考えて様々な問題に対処しているが、さらに、一方では史跡の活用を積極的に推し進めることが課題とされてきている。

史跡の環境整備は、活用を図る上で重大な要素と言える。多賀城跡の環境整備は、政庁跡、六月坂地区、外郭南門跡、外郭東門跡そして外郭東南隅地区で一応の成果を納めている。しかし、今後の整備はこれまでの点的な整備から、それらを連結する、面的な整備を中心に実施される予定であり、それには、周辺部を含めた広い範囲が整備の対象となる。このため、整備計画を実現するには、土地公有化の推進と民家の移転が必要とされるのは言うに及ばない。

このことからも、「代替地」が史跡の保存整備を図る上で必要不可欠の課題として考えられて来たことは至極当然のことである。

多賀城跡周辺地域は、市街化区域であるため、近年宅地化が著しく、西方の山王・新田地区では大規模な開発が生じてきている。市教育委員会では、文化財保護施策の一貫として、昨年度から史跡代替地の計画案作成に向けて、調査を開始し、計画を進めることにしたのである。



第2図　遺跡分布図

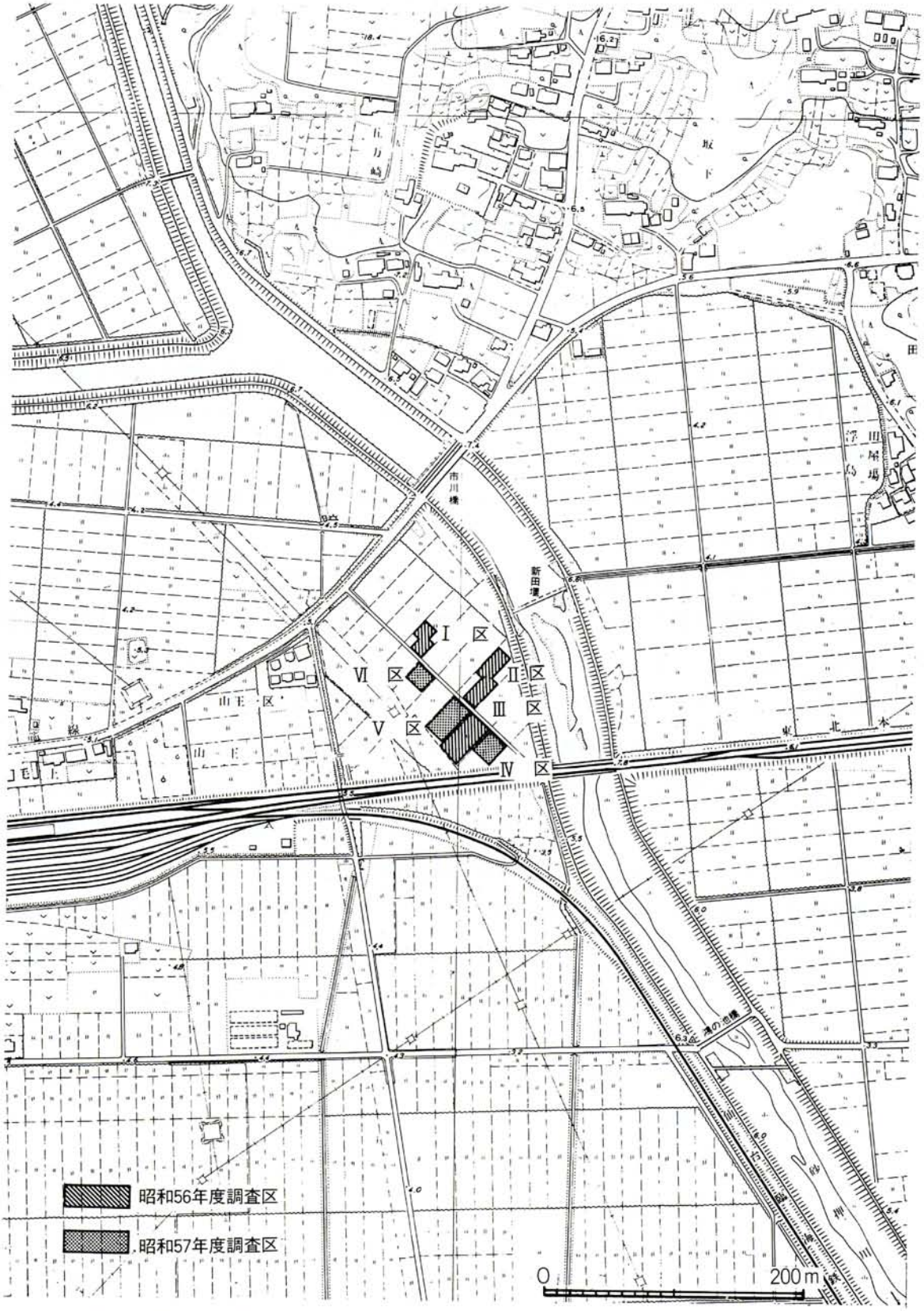
今回の調査は昨年からの継続事業として実施したものである。しかし、民間業者等による開発行為や公共事業への対応に迫られ、本調査が冬期間に行わざるを得ず、気象条件が悪いために調査は困難を強いられた。

Ⅳ　調査方法と経過

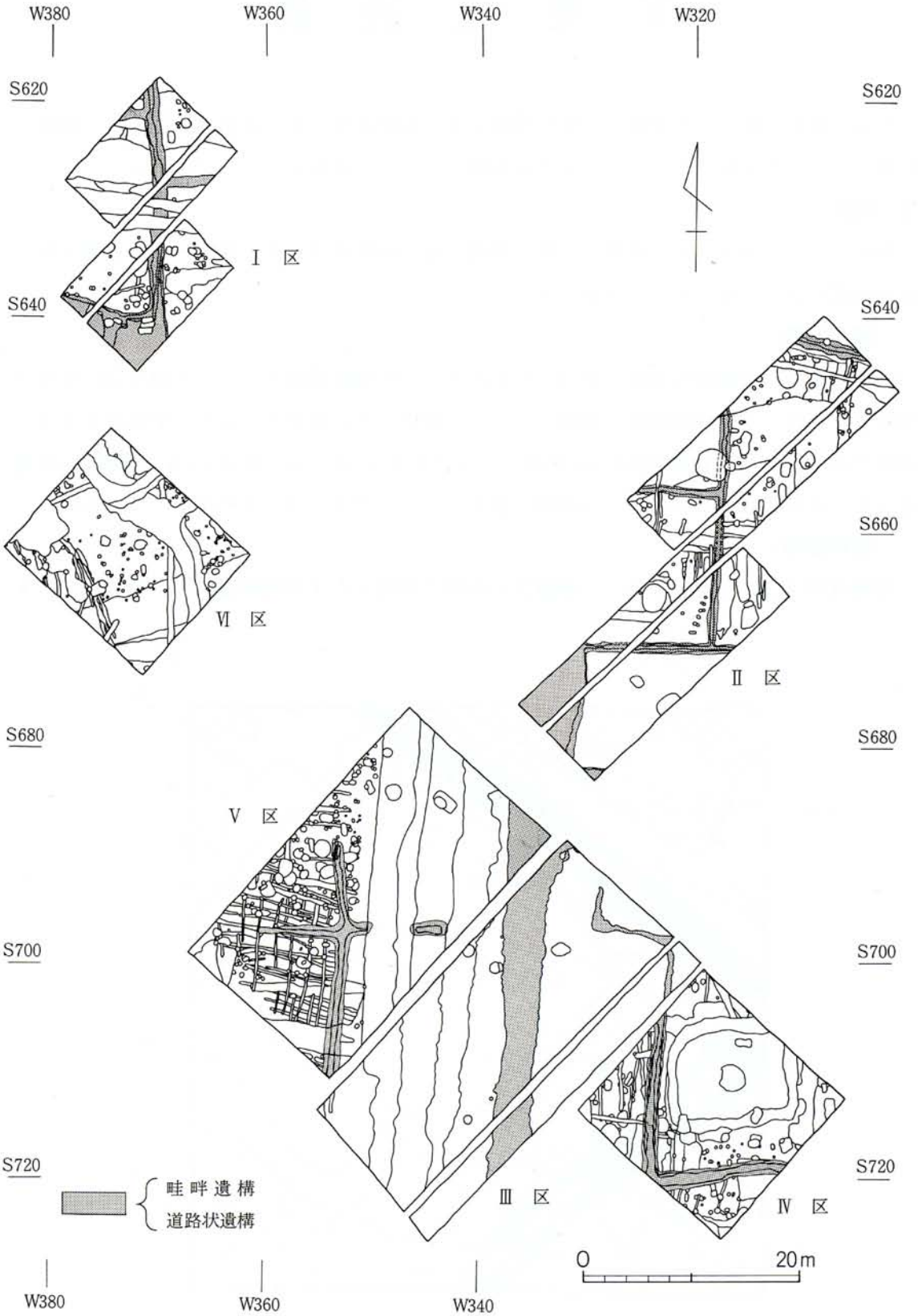
今回の調査は、昨年に引き続き３ケ所の水田を対象として調査を実施した。地区名は昨年度に調査を実施した地区をⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と称したため、今年度の調査地区を南より順にⅣ・Ⅴ・Ⅵ区と称した。調査対象面積は約1,500㎡で、その内の約1,200㎡について調査を実施した。

基準点は、昨年度調査を実施した際に、多賀城南門跡の測量基準点より移動しており今回もこの基準点を使用した。

調査は12月17日より開始した。まず、Ⅳ・Ⅴ区の表土剝離をバックホーにより行い、ⅣⅤ区ともに粗掘作業を行う（12月20日）。調査地区の実測を行うため、Ⅳ区・Ⅴ区に任意の基準点を設け、この基準点のトラバース測量を行う（12月21日）。Ⅳ・Ⅴ区において畦畔遺構を検出する。さらに他の遺構を検出するため遺構検出面まで掘り下げる。Ⅴ区北側で、溝やピット・土壙等の遺構を発見した。さらに、昨年Ⅲ区で発見した溝跡と同一の溝２条も発見した（12月24日）。12月26日より１月５日まで、年末年始の休暇とし、調査を一時中断する。Ⅵ区の表土剝離を行う（１月10日）。Ⅳ・Ⅴ区は、土層堆積状況の写真撮影を行った後、セクション図作成を行う。Ⅳ区の畦畔遺構の検出作業を行う（１月12日）。Ⅳ区の南側で検出した土壙から多量の土器が出土したため、写真撮影を行い土器を取り上げる（１月14日）。１月18日に降った雪のため調査区内の状況が悪く、１月23日まで作業を中断した。区の堆積状況の写真撮影を行った後、セクション図作成を行う（１月26日）。Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区ともに遺構の再検出を行い、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区の全景写真撮影後、平板により平面図を作成する（１月29日）。Ⅵ区の基準点のトラバース測量を行い、平面図にレベルを記入し、２月５日ですべての調査を終了する。



第3図　調査区配置図


W380
W360
W340
W320
S620
S640
S660
S680
S700
S720
I 区
II 区
III 区
IV 区
V 区
VI 区
畦畔遺構
道路状遺構
0
20m

第4図　遺構配置図

V 発見遺構

今回の調査で検出した遺構は、竪穴遺構１基、畦畔遺構５条、道路状遺構１条、溝跡、土壙、ピット等多数である。これらの各遺構について、調査区ごとに記述する。

(1) Ⅳ区

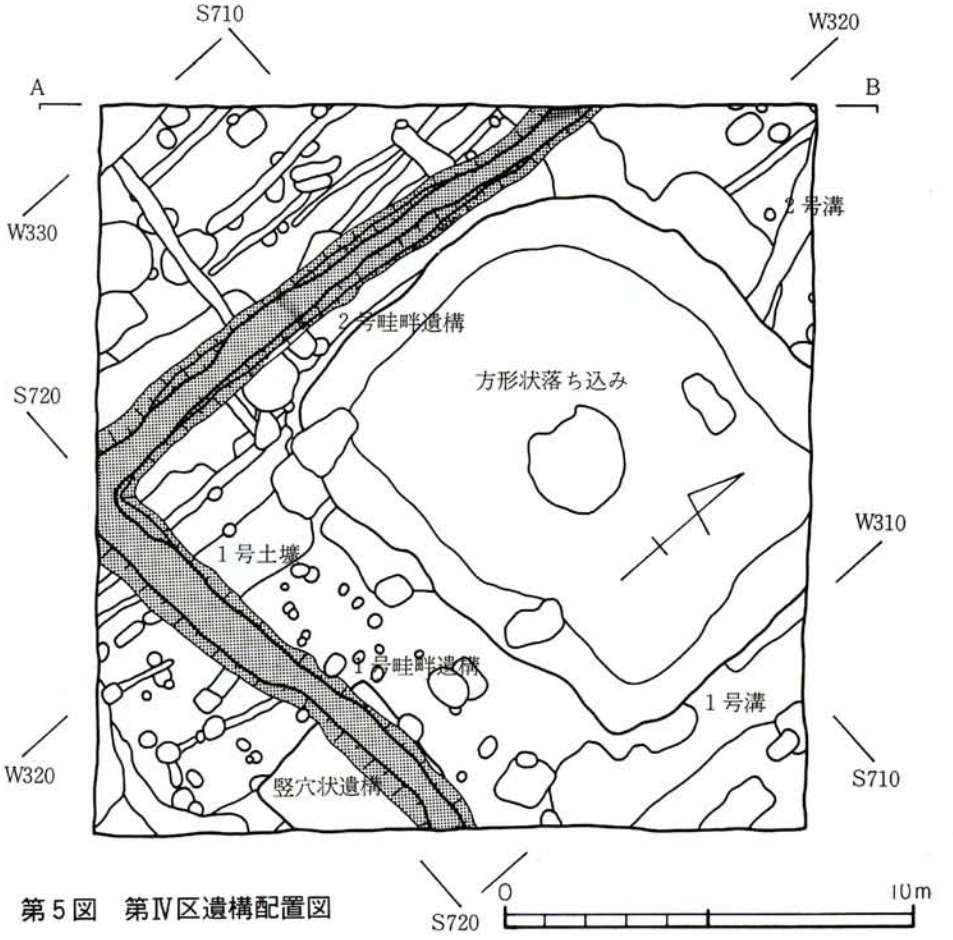
Ⅳ区において発見された遺構は、竪穴遺構１基、畦畔遺構２条、溝跡16条、土壙６基、方形状落ち込み１基、ピット多数である。

〈竪穴遺構〉

竪穴遺構は、調査地区南側で検出したもので、１号畦畔遺構やピットと切り合いをもつ。規模は、東側が１号畦畔遺構と重複し、さらに調査区外に延びているため全体の大きさは不明であるが、西側で南北約3.9m を計り、ほぼ方形を呈すると思われる。覆土は、暗褐色土で、多量の炭化物を含み、住居跡と思われる。須恵器の杯が１点出土している。

〈畦畔遺構〉

畦畔遺構は、２条検出された。調査区の南側で発見した１号畦畔遺構は、竪穴遺構、１



第５図　第Ⅳ区遺構配置図

号土壙や溝跡を切っているが、小ピットによって切られ構築されている。幅120～180cm、高さ約30cmで緩やかな高まりを呈し、東西方向へ延びる。２号畦畔遺構は、西壁付近で１号畦畔遺構よりほぼ直角に北へ延びる。溝や土壙などを切って構築している。幅は130～150cmを計り、高さ30～45cmとやや急な高まりを呈している。

〈溝　跡〉

溝跡は、南北に走る溝が14条、東西に走る溝が２条の計16条発見された。１号溝跡は調査区の東側において検出され、方形状落ち込み、土壙、ピットに切られている。最大幅230cm、最小幅70cmとかなり不整形である。須恵器杯・甕・蓋や土師器杯・甕の小破片が出土している。２号溝跡は、調査区北側で発見した。幅50～70cmを計り、南北に走るが、他の溝とは方向を異にしている。覆土より土師器の杯が出土している。その他の溝跡は、幅が20～50cmと狭いものが大部分である。

〈土　壙〉

土壙は、６基発見したが、大きさや形はさまざまである。１号土壙は、調査地区の南側において発見された。１号畦畔遺構、ピット、土壙などに切られており、大きさや形態は不明である。出土遺物は、須恵器杯・鉢、土師器杯がある。

〈方形状落ち込み〉

方形状落ち込みは、調査地区のほぼ中央部において発見されたもので、南北10.7m、東西12.1mを計り、不整方形を呈している。方形状落ち込みは、１・２号溝や土壙などを切っているが、電柱埋設の掘り方に削平されている。覆土は、黒褐色土であるが、その周辺部は、灰白色土を含む暗灰褐色土がみられる。遺構の中央部に、黄褐色土の高まりがあり、須恵器杯、土師器杯の破片が多量に出土している。

(2)　Ⅴ区

Ⅴ区で発見された遺構は、畦畔遺構３条、道路状遺構１条があり、他に溝跡、土壙、ピットが多数発見された。

〈畦畔遺構〉

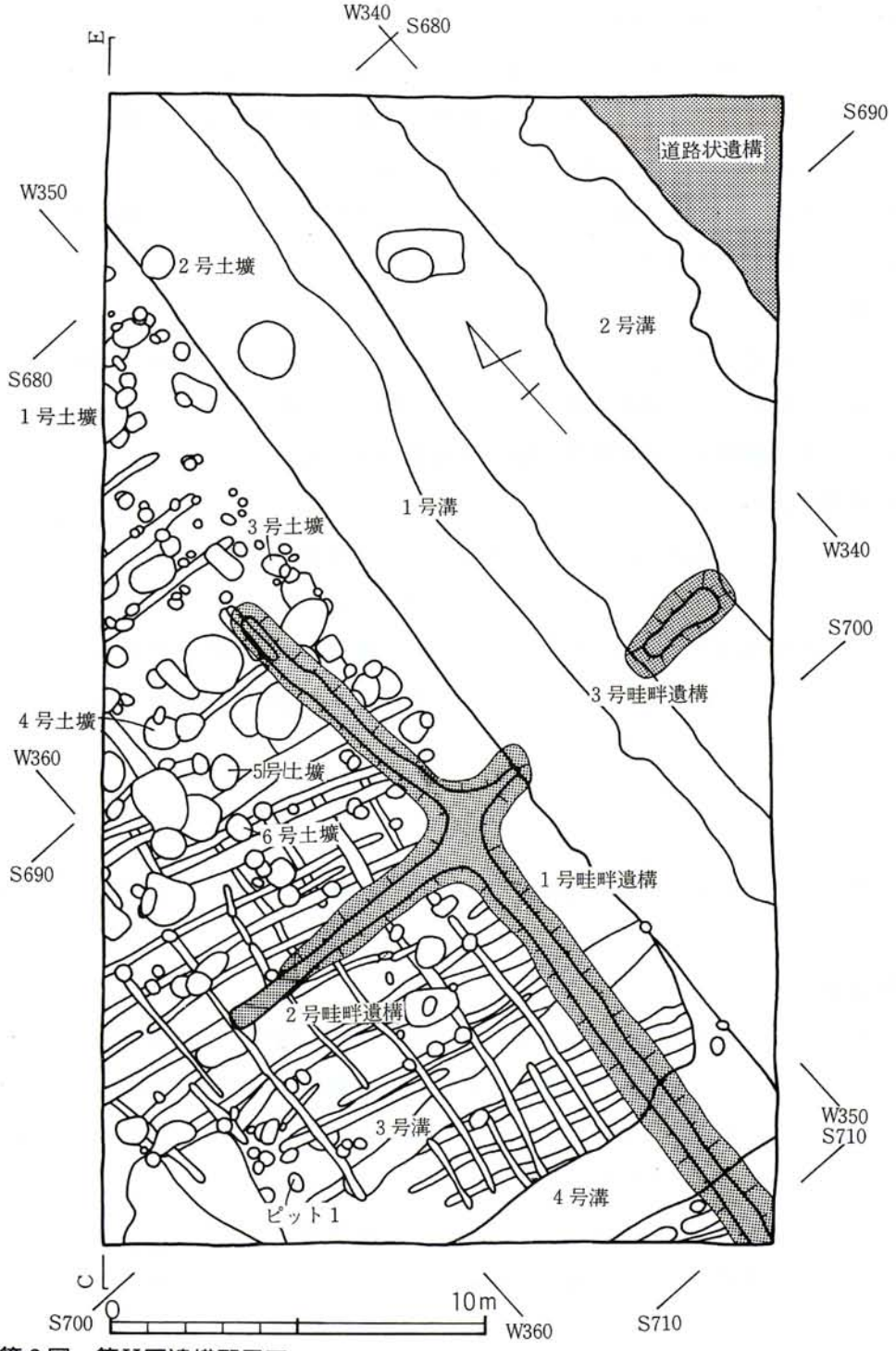
１号畦畔遺構は、調査地区の西南隅より北方向に延び、途中で切れる。幅の狭い多数の溝を切っているが、４号溝に切られ構築されている。幅110～150cm、高さは南側で20～25cmを計り、北側では４～８cmとなり、緩やかな高まりを呈している。この畦畔遺構は、昨年度Ⅲ区の西北隅で検出した畦畔遺構に続くものである。

２号畦畔遺構は、調査区のほぼ中央部で、１号畦畔遺構より直角に西方向に延びる。幅の狭い溝を切って構築している。幅50～120cmで西へ延びるに従って幅が狭くなる。高さは、10～15cmを計り、緩やかな高まりを呈している。

3号畦畔遺構は、2号畦畔遺構の分岐点より、やや北側から東方向へ延びている。1・2号溝に切られている。幅120～150cm、高さ15～25cmを計り、緩やかな高まりを呈している。

〈溝　跡〉

溝跡は、多数発見された。特に調査地区の西側においては、幅が20～40cmと狭い溝跡が、



第6図　第Ⅴ区遺構配置図

東西と南北の方向に走っている。1・2号溝は、調査地区の中央部から東側において発見された南北に走る溝である。両者は、ともに3号畦畔遺構を切っているが、2号溝は、土壙やピットによって切られている。1号溝跡の幅は230～360cmを計り、2号溝跡の幅も230～420cmを計り、ともに大溝である。

〈土　壙〉

土壙は、大きさや平面形もさまざまである。ここでは、遺物の出土した土壙のみについて記述する。

1号土壙は、調査地区の北側で発見した。平面形や大きさは、遺構が調査区外に延びているため不明である。須恵器杯、土師器杯の破片が出土している。2号土壙は、調査地区の北側で1号土壙の東側において発見された。1号溝跡を切り、約80～90cmの楕円形を呈している。遺物は、須恵器杯・小形甕、土師器杯・甕の破片が出土している。3号土壙は、1号土壙の南側において発見した。小ピットに切られ、大きさは、約50×70cmの楕円形を呈している。須恵器杯の破片が出土している。4号土壙は、3号土壙の西側で、北壁付近において発見され、土壙やピットに切られている。大きさは、約90×100cmを計り、楕円形を呈している。須恵器杯・甕、土師器甕の破片が出土している。5号土壙は、4号土壙の南側において発見されている。溝を切っており、約75×100cmを計る楕円形である。遺物は、土師器杯が出土している。6号土壙は、5号溝の南側において発見された。幅の狭い溝を切っている。大きさは、約70×80cmを計り、楕円形を呈している。土師器の高台付杯が出土している。

〈ピット〉

ピットは、調査区の中央部から西側において多く発見した。調査区の西側で発見したピット1より須恵器の杯が1点出土している。

(3)　Ⅵ区

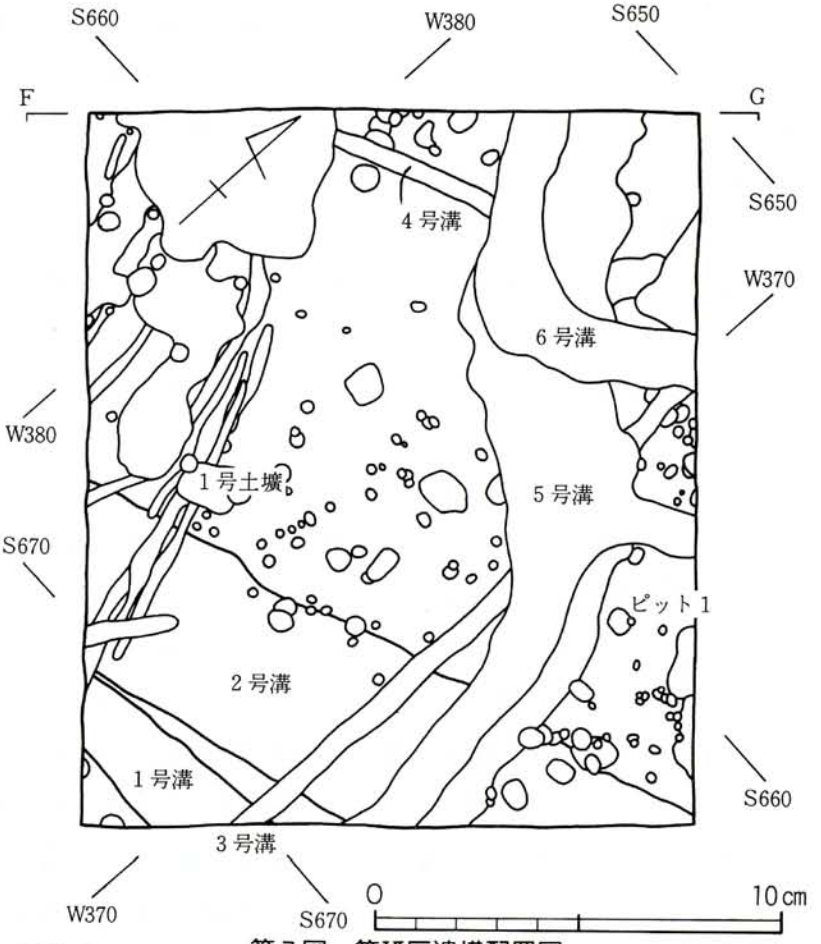
Ⅵ区で発見された遺構は、溝跡15条、土壙およそ10基、ピット多数である。

〈溝　跡〉

発見された溝の方向は、南北方向に走るもの、東西に走るもの、蛇行し南北方向に走るものとがある。

1号溝は、調査区の南側において発見された東西に走る溝である。3号溝や調査区の西側で発見した幅の狭い溝によって切られている。幅は、約150～200cmを計る。2号溝は、1号溝の北側において発見されたもので、1号溝と平行して東西に走り、3・5号溝や西側で発見した幅の狭い溝に切られている。幅は、約400～430cmを計る大溝である。3号溝は、調査区の中央部において発見した南北に走る溝である。1・2号溝を切っているが、5・6号溝によって切られている。幅は、約50～60cmを計る。4号溝は、調査区北側において発

見された東西に走る溝である。ピットを切っているが、6号溝や後世の落ち込みによって切られている。幅は、約50cmを計る。5号溝は、調査区東側において発見され、南北に蛇行して走る溝である。2・3号溝を切っているが、6号溝によって切られている。幅は、約200～300cmを計る。6号溝は、調査区の北側において発見した溝である。この溝は、東西方向に走り、調査区の北側でほぼ直角に北方向へ折れ曲がる。3・4・5号溝を切っている。幅は、約100cmを計る。



第7図　第Ⅵ区遺構配置図

この他に、調査区の西側において幅が約20～30cm程の狭い溝が9条発見されている。これらの溝は、ピットによって切られているが、2号溝を切って構築されている。

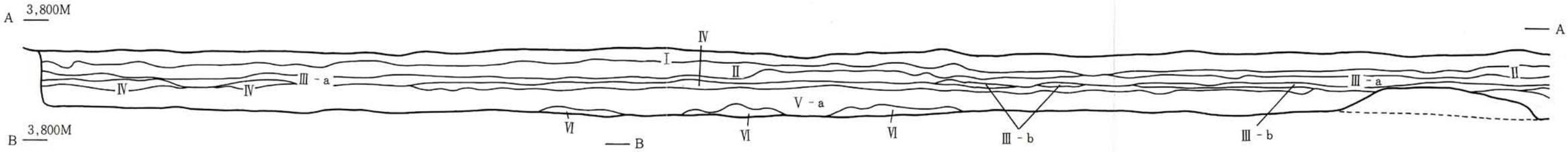
〈土壙〉

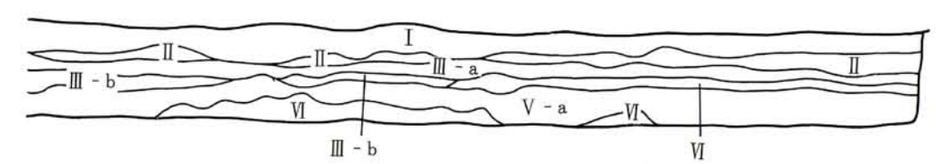
土壙は、調査区全域で検出された。平面形は円形、楕円形、方形を呈し、大きさもさまざまである。

1号土壙は、調査区の西側において発見された。幅の狭い溝を切っているが、ピットによって切られている。大きさは、約120×150cmを計り、平面形は不整方形である。遺物は須恵器杯、土師器杯・甕が出土している。

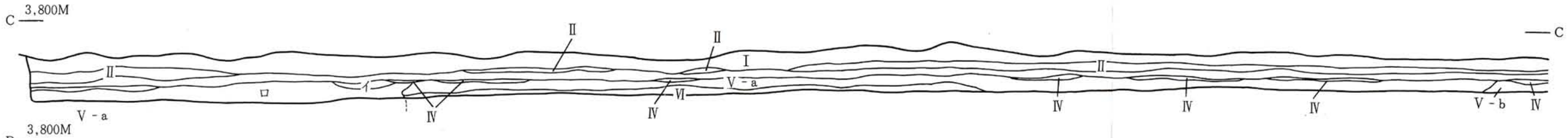
〈ピット〉

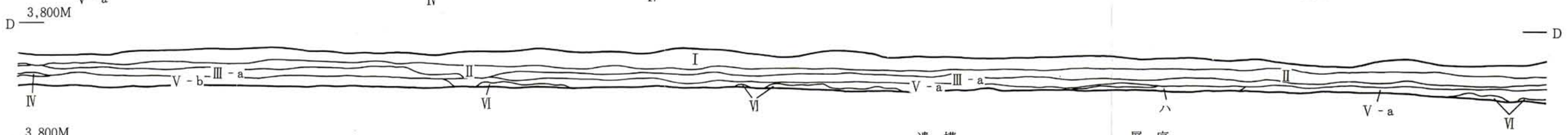
ピットは、調査区全域より発見されている。大きさや形態はさまざまである。調査区東側において発見したピット1より、古銭が1点出土している。

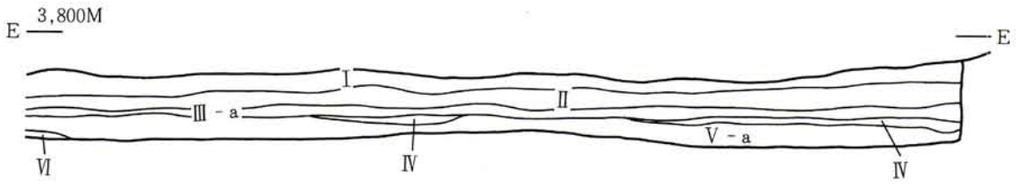




第Ⅳ区北壁セクション図







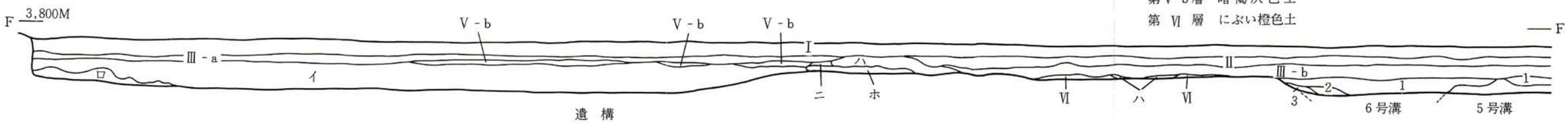
遺　構

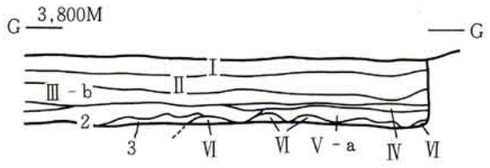
イ　暗褐色土
ロ　暗褐灰色土
ハ　暗褐色土

層　序

第Ⅰ層　褐　色　土
第Ⅱ層　灰褐色土　} 耕　作　土
第Ⅲ-a層　にぶい橙色土
第Ⅲ-b層　灰褐色土
第Ⅳ層　暗灰褐色土
第Ⅴ-a層　褐灰色土
第Ⅴ-b層　暗褐灰色土
第Ⅵ層　にぶい橙色土

第Ⅴ区北壁セクション図





遺　構

イ　暗褐色土
ロ　褐灰色土
ハ　暗褐灰色土
ニ　暗褐灰色土
ホ　暗褐灰色土

第Ⅵ区北壁セクション図

5号溝
第1層　暗灰褐色土
第2層　褐灰色土
第3層　暗褐灰色土

6号溝
第1層　暗灰色土
第2層　灰　色　土
第3層　黄褐灰色土

0　3m

第 8 図　セクション図

Ⅵ 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼き土器、陶磁器、瓦、硯、砥石、古銭、鉄製品、土製品などである。出土遺物の中では、土師器と須恵器の占める割合が圧倒的に多く、両者を比較すると２：３で須恵器の出土量が土師器を上まわる。ついで瓦の出土量が多いが、大部分は小破片である。

これらの遺物は、遺構内出土のものと、堆積土出土のものとに分けられるが、圧倒的に後者からの出土量が多い。これは、調査の主目的が遺構の確認に置かれていたためである。以下、遺構内出土遺物と堆積土出土遺物に分けて記述する。

１．遺構内出土遺物

(1) Ⅳ区

〈竪穴遺構〉 北西コーナー付近から須恵器杯（第９図１）が出土している。口径13.2cm、底径 7.2 cm、器高 3.5 cmを計る。底部は回転糸切りの後、無調整のものである。内外面ともにロクロナデが施されており、体部外面のロクロ成形による段は顕著ではない。体部はやや丸味をもって立ち上がり、その後直線的に外傾して口縁部に至る。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土にはやや大きめの砂粒を含む。

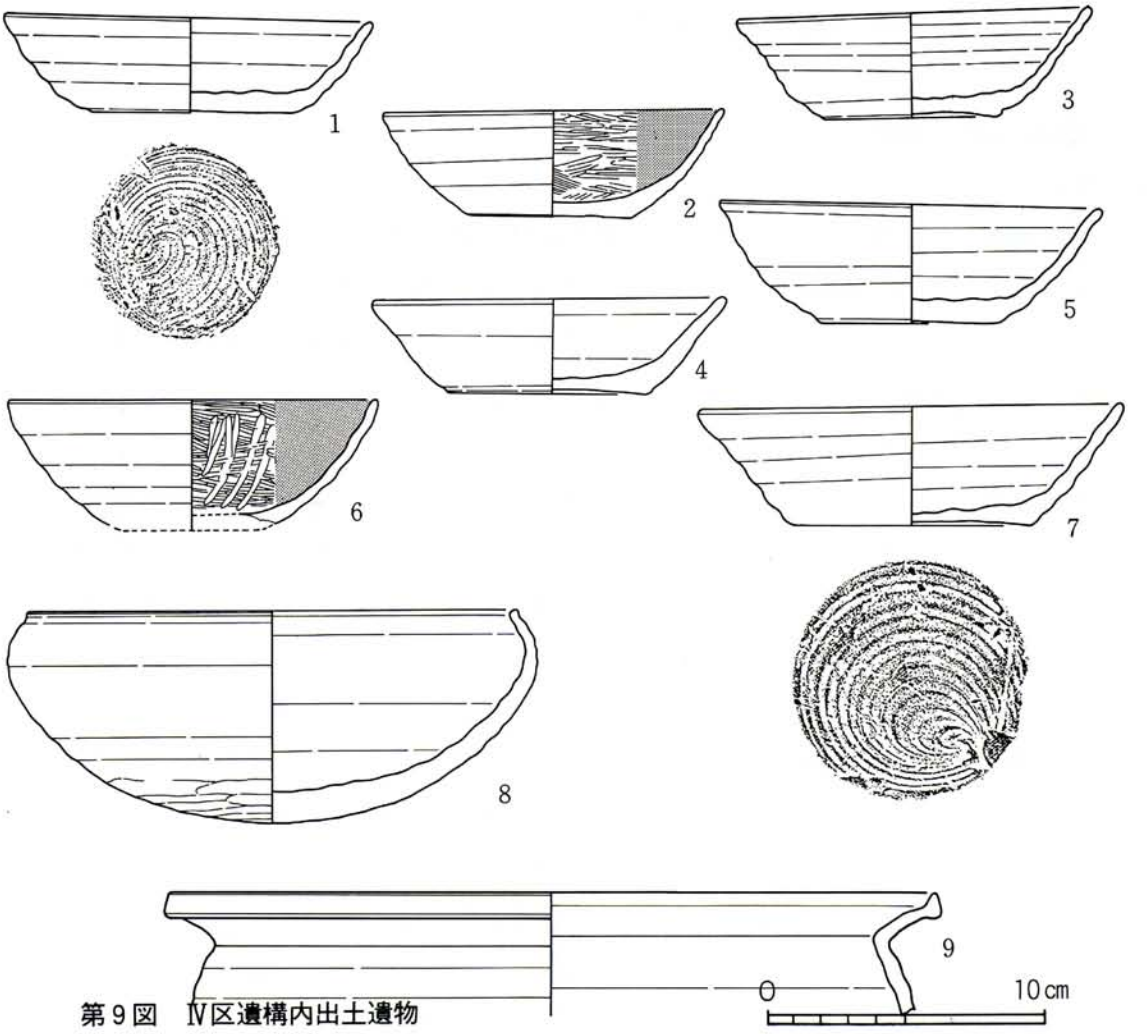
〈１号土壙〉 土師器杯・甕、須恵器杯・鉢がまとまって出土している。土師器杯（第９図２）はロクロ成形のもので、内面をヘラミガキ、黒色処理されている。口径12.4cm、底径 6.3 cm、器高 4.0 cmを計る。底部全面から体部中頃まで回転ヘラケズリ調整が施され、切り離し痕跡が不明なものである。内面のヘラミガキは、口縁部から体部にかけては横方向に、底部では放射状に施されている。

土師器甕（第９図９）は推定口径28.0cmを計る大形のものである。頸部で「く」の字形に外反し、口縁の端部が上方に引き出されている。最大径は口縁部にあると思われるが、体部以下の大部分を欠損しているため全体の形態は不明である。

須恵器杯は３点出土している。第９図３は口径12.8cm、底径 6.3 cm、器高 3.8 cmを計る。底部は上げ底気味で、回転ヘラ切りの痕跡が顕著に残り、周縁をナデ調整している。体部との境に段を有し、体部は丸味をもって立ち上がり口縁部でやや外反する。色調は内外面とも灰色であるが、一部赤褐色を呈する。第10図4は口径12.9cm、底径7.5cm、 器高3.5cmを計り、口径に比べ底径の大きいものである。底部は回転糸切り後無調整である。全体的に厚手で、特に体部下半で器厚を増している。第９図５は口径13.9cm、底径 6.5 cm、器高 4.3 cmを計る。底部は回転糸切り後無調整である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁

部で大きく外反する。色調は灰白色を呈し、胎土はかなり大きめの砂粒を含む。

第９図８は須恵器鉢である。推定口径17.9cm、器高 7.7 cm、最大径を体部上位の口縁近くにもち 19.2cmを計る。底部は丸底を呈し、屈曲をもたず、球形に丸味をもって立ち上がり、口縁部で大きく内湾する。口縁部外面には浅いくぼみがまわっており、体部との境に軽い稜をつくっている。全体的にロクロによる凹凸が少なく、底部には回転ヘラケズリ調整が施されているが、その後のロクロナデ調整によって明瞭な痕跡を残さない。色調は暗灰色を呈し、外面口縁部から内面全体には灰かぶりによる自然釉がみられる。底部外面には火ダスキ痕が観察できる。



第９図　Ⅳ区遺構内出土遺物

〈１号溝〉　土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

土師器杯（第９図６）は、底部を欠損しているため切り離し技法や調整痕は不明であるが、内湾しながら立ち上がる体部をもつ。推定口径は13.5cmを計る。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。ヘラミガキは横方向に施した後、底部から口縁部にかけて放射状

にやや幅の広いミガキを施している。

須恵器杯（第９図７）は、口径15.5cm、底径 8.6 cm、器高 4.4 cmを計る大形のものである。底部は回転糸切り後無調整で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。器厚は全体的に厚手で、体部の内外面にはロクロ成形による凹凸が顕著に残る。この他に底部破片で回転ヘラ切り後無調整のものが出土している。

(2) Ⅴ区

〈**1号土壙**〉　須恵器杯が２点出土している。いずれも約½残存のものである。第９図１は推定口径13.8cm、底径 7.4 cm、器高 4.2 cmを計る。底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラケズリ調整をしている。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。色調は内外面とも灰白色を呈し、胎土は精選され堅緻である。第11図２は推定口径13.6cm、底径 5.8 cm、器高 5.0 cmを計る。底部は回転糸切りの後、周縁をかるくナデ調整している。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。器形は前者と非常に類似するものである。体部下半にはロクロによる凹凸を顕著に残し、底部との境にかるい段を有する。色調は内外面とも灰色であるが、一部赤褐色を呈する。

〈**2号土壙**〉　土師器杯と須恵器杯が出土している。第10図３はロクロ使用の土師器杯で、口径13.0cm、底部 6.2 cm、器高 4.1 cmを計る。底部全面から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整を施し、切り離しの痕跡を消しているものである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部で短く外反する。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

第10図４は口径13.6cm、底径 6.5 cm、器高 3.6 cmを計る須恵器杯である。底部は回転ヘラ切りの後、全面をナデ調整しており、特に周縁ではヘラ切りの痕跡を完全に消している。体部は直線的に大きく外傾する。体部下半には粘土紐の積み上げ痕が沈線状に明瞭に残っており、また底部には「―」のヘラ描きがされている。

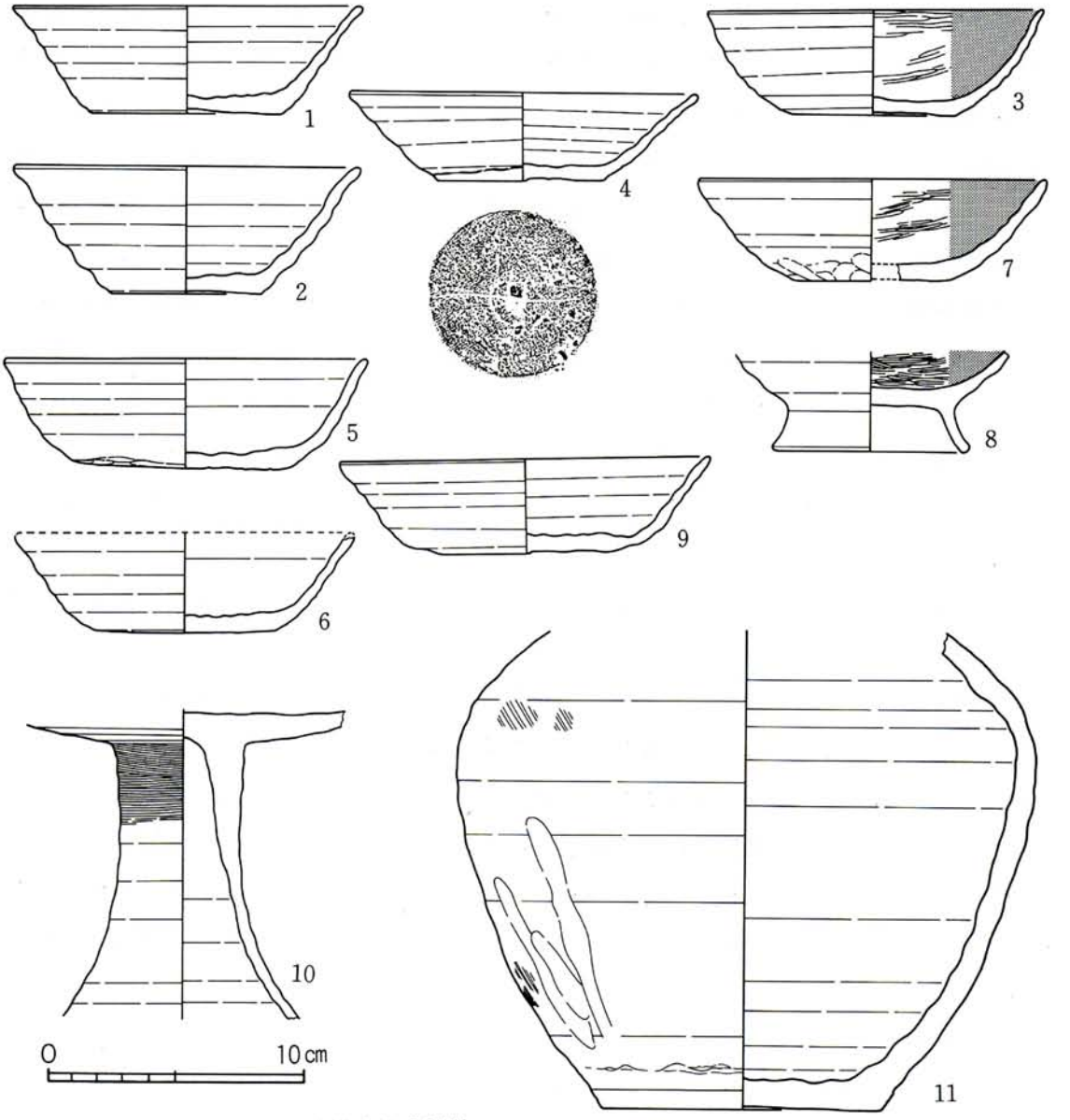
〈**3号土壙**〉　図示できるものでは、須恵器杯が２点出土している。第10図５は約⅔残存のもので、推定口径14.1cm、底径 8.2 cm、器高 4.3 cmを計る。底部には回転ヘラ切りの痕跡が粗く残り、その周縁には手持ちヘラケズリが施されている。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部でやや外反する。内面は、ロクロ成形の段はみられず全体的になだらかな器面をもつ。第10図６は推定口径13.4cm、底径 7.2 cm、器高 3.9 cmを計る。約¼残存のもので、口縁部の先端を若干欠損している。底部は回転ヘラ切り無調整で、体部は直線的に外傾する。

〈**4号土壙**〉　土師器甕、須恵器杯・甕が出土しているが、全て破片のため図示できるものはない。須恵器杯は回転ヘラ切りの後、底部周縁をかるくナデ調整しているものである。須恵器甕の外面には平行の叩きが細かく施され、内面には青海波文の叩き痕がみられる。

〈**5号土壙**〉　土師器杯が1点出土している（第10図7）。推定口径13.4cm、底径 6.1cm、器高 4.0cmを計る。底部全面から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整を施し、切り離し痕跡を消しているものである。体部はやや内湾気味に立ち上がり、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

〈**6号土壙**〉　図示できるものには土師器高台付杯（第10図8）がある。口縁部を欠損しているため全体の器形は不明である。高台はやや長く、外側にふん張るものである。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されているが、外面は磨滅のため、特に底部の切り離し技法や調整は観察できない。

〈**1号溝**〉　図示できるものには須恵器甕（第10図11）がある。体部は約½残存してい



第10図　V区遺構内出土遺物

るが頸部より上を欠損している。体部に最大径をもち、推定22.4cm、底径は10.9cmを計る。底部周縁から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整を施しているが、その後底部全面を丁寧にナデ調整し、また体部もロクロナデ調整を施しているため明瞭な痕跡は残っていない。体部外面は全面的に平行叩きを施した後、これもロクロナデ調整によって、その痕跡を消している。また体部下半には、僅かではあるが縦方向のヘラケズリが施されている。色調は内面で青灰色、外面で暗灰色を呈する。焼成は良好で、胎土も精選され堅緻である。

〈**3号溝**〉　須恵器高杯が1点出土しているが、杯部と脚部の先端を欠損しているものである（第10図10）。杯部の底部外面には回転ヘラケズリ調整を施し、脚部付着の後ロクロナデ調整されている。脚部上半には、ヘラ状工具によると思われるナデ調整が施されている。

〈**ピット1**〉　須恵器杯が1点出土している（第10図9）。口径14.6cm、底径6.2cm、器高3.7cmを計る。底部は回転ヘラ切りの後、周縁を手持ちヘラケズリ調整をしているものである。

2．堆積土出土遺物

堆積土は、大きく5層に分けることができる。このうち遺物の出土量が多いのは、第3層と第5層である。第1層は現在の水田の耕作土であり、第2層はその床土にあたる。第3層は水田の影響により褐鉄鉱が沈殿して、全体的に赤味をおびた土色を呈する。この層は、第5層についで遺物の出土量が豊富であるが、小破片が多く、土師器、須恵器などに混じって近世以降の陶磁器も出土している。第4層は、Ⅳ区とⅤ区の一部でのみ観察できる土層である。堆積は薄く、遺物は僅かしか出土していない。第5層からは多量の遺物が出土し、図示できたものの約9割は、この層出土のものである。土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦などがおもに出土している。

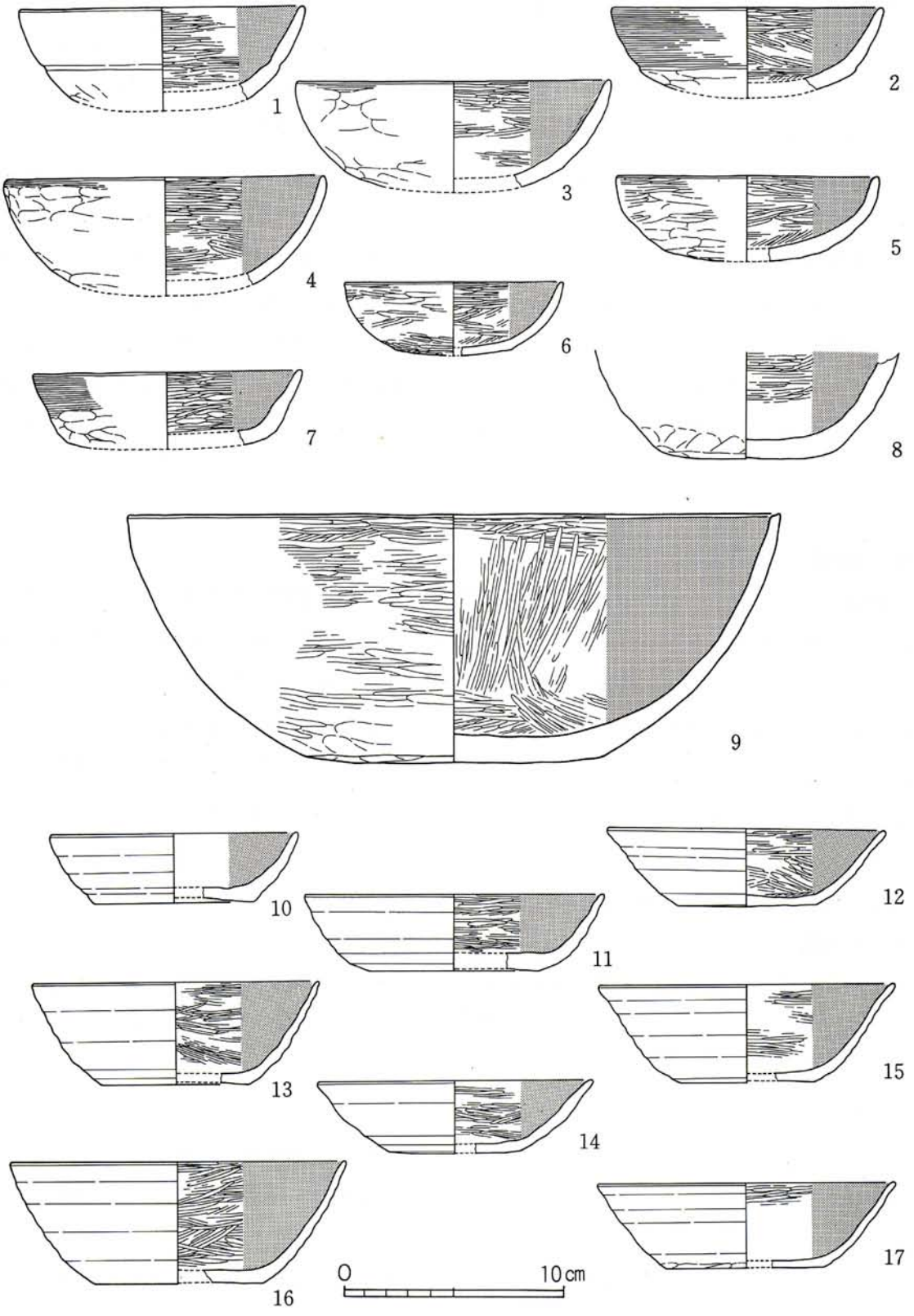
(1) 土師器

土師器には杯、高台付杯、甕の器種がある。この中で杯の出土量が最も多く、図示できたものの中でも約⅔を占める。以下、器種毎の特徴を述べ、また個体数の多いものについては、分類を試みながら記述していく。

〈杯〉

製作の際にロクロを使用しないものと、使用するものの2種類に大別できる。前者をA類、後者をB類とする。さらに、A類においては、器形の特徴や法量などから3種類に、B類においては、ロクロからの切り離しや調整の技法から5種類に細分することができる。これらは若干の例外はあるが、ほとんど全ての個体が内面にヘラミガキ、黒色処理が施されているものである。

A－Ⅰ類：底部は丸底を呈し、体部外面の中位もしくはやや下方に段を有するものであ



第11図　堆積土出土遺物

る（第11図１・２）、外面は段を境にして、上半部をヨコナデ、下半部以下をヘラケズリしている。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されているが（ａ）外面の段に対応して、内面にも軽い段をもつもの（１）と、（ｂ）段をもたず口縁部から底部まで緩いカーブを描くもの（２）とに区別される。

Ａ－Ⅱ類：底部欠損の個体が多いため断定はできないが、体部に段をもたずやや平底気味の丸底を呈するものである（第11図３、４）。口縁部から底部にかけて器厚を増し、体部は丸味をもって立ち上がるものである。外面は、全体的にヘラケズリが行われており、その後、口縁部だけにヨコナデが施されている。

Ａ－Ⅲ類：底部をケズリ出しているが、やや丸底気味の底部をもつもの（第11図５～９）。この種類の中には、（ａ）底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部は直立気味になるもので小形を呈するもの（５・６）、（ｂ）底部から外傾してほぼ直線的に立ち上がるもの（７）、（ｃ）底部から内湾気味に立ち上がるもので、大形を呈するもの（８・９）がある。いずれも内面がヘラミガキ、黒色処理が施されているが、（ａ）は外面も黒色を呈し全体がヘラミガキされているものである。（ｂ）（ｃ）は体部下半以下にヘラケズリが行われている。

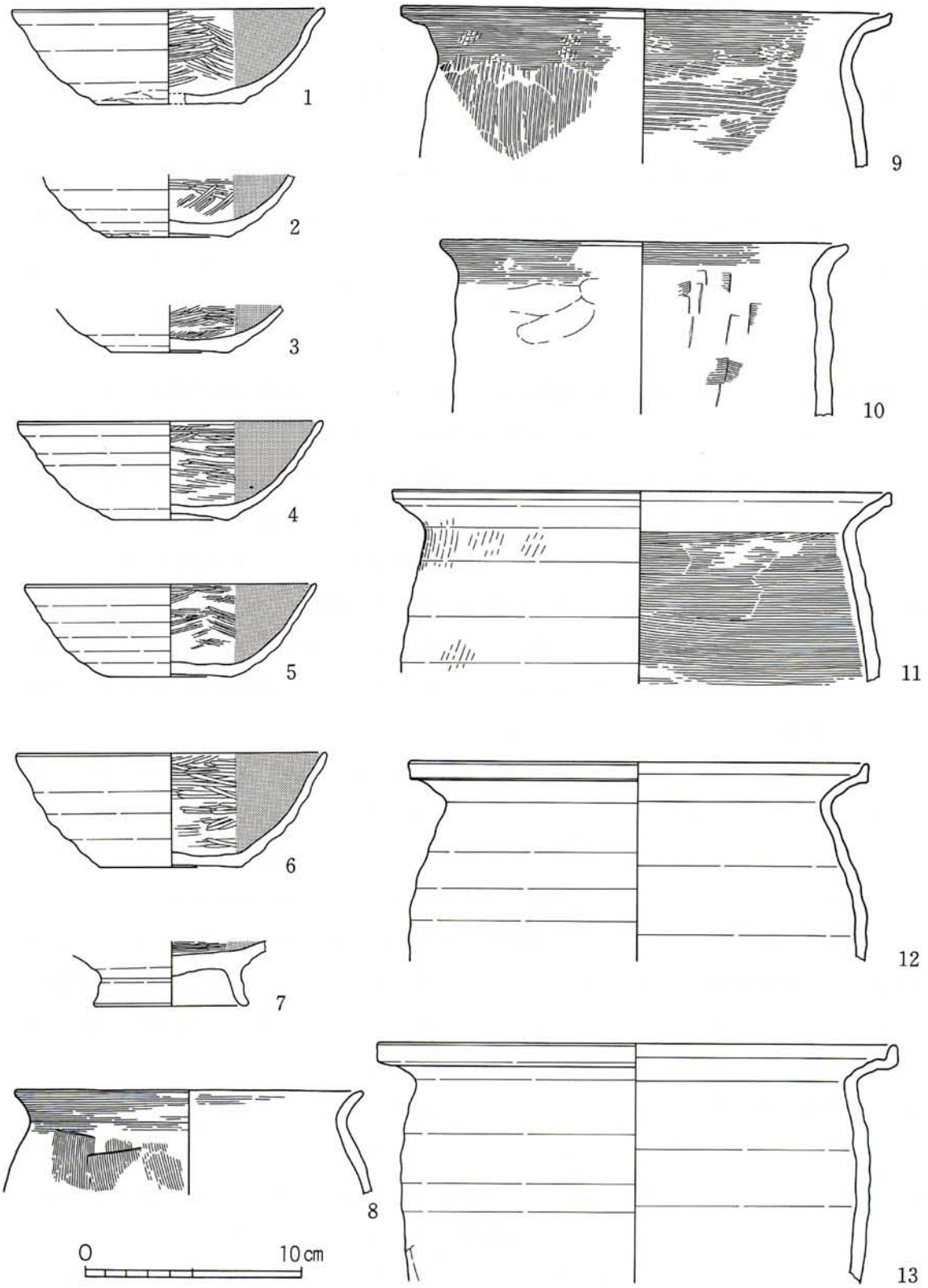
Ｂ－Ⅰ類：底部を回転ヘラ切りの後、手持ちヘラケズリ調整しているものである（第11図10）。推定口径11.4cm、底径 7.4cm、器高 3.2cmを計り、小形を呈する。底部は上底気味で、ヘラケズリは底部周縁から体部下端にかけて行われている。器面は粗く、内面に有機物の付着や剝離しているところもみられる。

Ｂ－Ⅱ類：底部を回転ヘラケズリ調整しており、切り離し痕跡が不明なものである（第11図11～15）。口径12.4～13.7cm、底径 6.0～ 7.8cm、器高 3.3～ 4.7cmの間に測定値が集中する。回転ヘラケズリは、体部中位から下端部に２段にかけて施されているものが多い。体部が丸味をもって立ち上がり、口縁部でやや外反するものも多くみられる。

Ｂ－Ⅲ類：底部に手持ちヘラケズリ調整しており、切り離し痕跡が不明なものである（第11図16・17）。底部全体を丁寧に手持ちヘラケズリするもの（16）と、体部下端部にも施されるもの（17）とがある。前者は、体部が内湾気味に立ち上がるもので、口径15.4cm、底径 7.7cm、器高 5.6cmを計り、大形を呈するものである。

Ｂ－Ⅳ類：回転糸切りの後、手持ちヘラケズリ調整を施すものである（第12図１～３）。底部周縁から体部下端にかけて、手持ちヘラケズリが施されるもの（１・２）と、底部周縁のみに行われるもの（３）とがある。１は推定口径14.5cm、底径 6.7cm、器高 4.4cmを計る。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反するものである。

Ｂ－Ⅴ類：回転糸切りの後、無調整のものである（第12図４～６）。口径13.5～14.2cm、底径 5.4～6.5cm、器高 4.3～ 5.3cmの間に測定値がおさまる。体部は全て内湾しながら立ち上がり、そのまま口縁部に至っている。



第12図　堆積土出土遺物

〈高台付杯〉

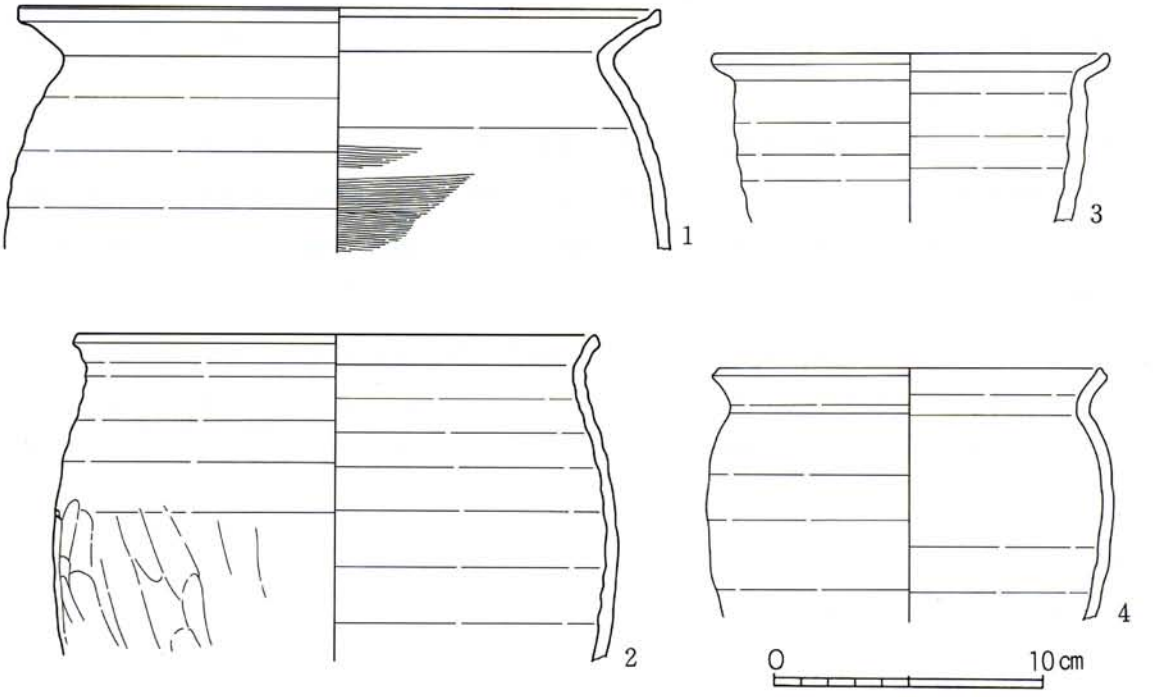
図示できたものは1点だけである（第12図7）。底部が残存しているだけで形態は不明である。高台は上部に段を形成して、やや外側にふん張るものである。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

〈甕〉

杯と同様に、製作の際にロクロを使用しないものと、使用するものとに大別できる。前者をA類、後者をB類とする。出土量はB類が圧倒的に多いが、いずれも破片が多く、全体の形態がわかるものは出土していない。

A類：図示できたものは3点だけである。全て口縁部から体部上半にかけて残存しているものである（第12図8～10）。8は第3層出土のもので、口縁部の内外面にヨコナデ、体部外面には縦方向にヘラナデを施したものである。最大径を体部にもつものと思われる。推定口径16.2cmを計る。9は円筒状の体部に「く」の字形に外に開く口縁部をもつものである。調整は体部内面で横方向に、外面で縦方向に刷毛目が施されている。口縁部には内外面ともヨコナデが施され、刷毛目の上端を消している。10は、円筒状の体部に「く」の字形に短く外反する口縁部をもつものである。口縁部には内外面ともヨコナデが施され、体部内面にはヘラナデが施されている。体部外面は、ヘラケズリされているとみられるが、器面が粗く判然としない。

B類：大形のものと小形のものとがある。全て底部を欠損しているものである。大形のも



第13図　堆積土出土遺物

のには最大径を口縁部にもつもの（第12図11～13）と、体部にもつもの（第13図１・２）に分けられる。前者には、体部内面に横方向へのナデが施され、外面には平行叩きを施した後、ロクロナデ調整によって、その痕跡を消しているものがある（11）。後者に属する２は、外面の体部中位以下に縦方向へのヘラケズリが施されている。また口縁部は他の個体が「く」の字形に外側に屈曲するのに対して、僅かに外反する程度である。

小形のものは図示できたものが２点ある。第13図３は最大径を口縁部にもち、推定口径14.6cmを計る。口縁端部が上方に引き出され、丸くおさまるものである。第13図４は口径14.7cm、最大径を体部にもち15.2cmを計る。体部でゆるやかなふくらみをもつものである。

(2) 須恵器

須恵器には杯、高台付杯、高杯、蓋、甕、壺、双耳杯、高台付盤の器種がある。この中では杯が主体を占め、その出土量は圧倒的に他の器種を上回っている。図示できたものだけでも44点にのぼる。

〈杯〉

底部の切り離し技法、調整技法によって６種類に分類できる。

全体的にみると、底部を回転ヘラ切り、回転糸切りで切り離し、その後、ナデ調整するか無調整のものが多い。

Ⅰ類：静止糸切りの後、手持ちヘラケズリ調整を施しているもの（第14図１）。

破片であるが１点出土している。推定口径14.8cm、底径7.5cm、器高3.9cmを計る。手持ちヘラケズリは底部周縁から体部下端にかけて行われているため、底部と体部の境は不明瞭である。体部は丸味をもって立ち上がり、中位よりやや内湾して口縁部に至る。色調は内外面とも明褐色を呈する。

Ⅱ類：回転ヘラ切りの後、回転ヘラケズリ調整を施しているもの（第14図２・３）。

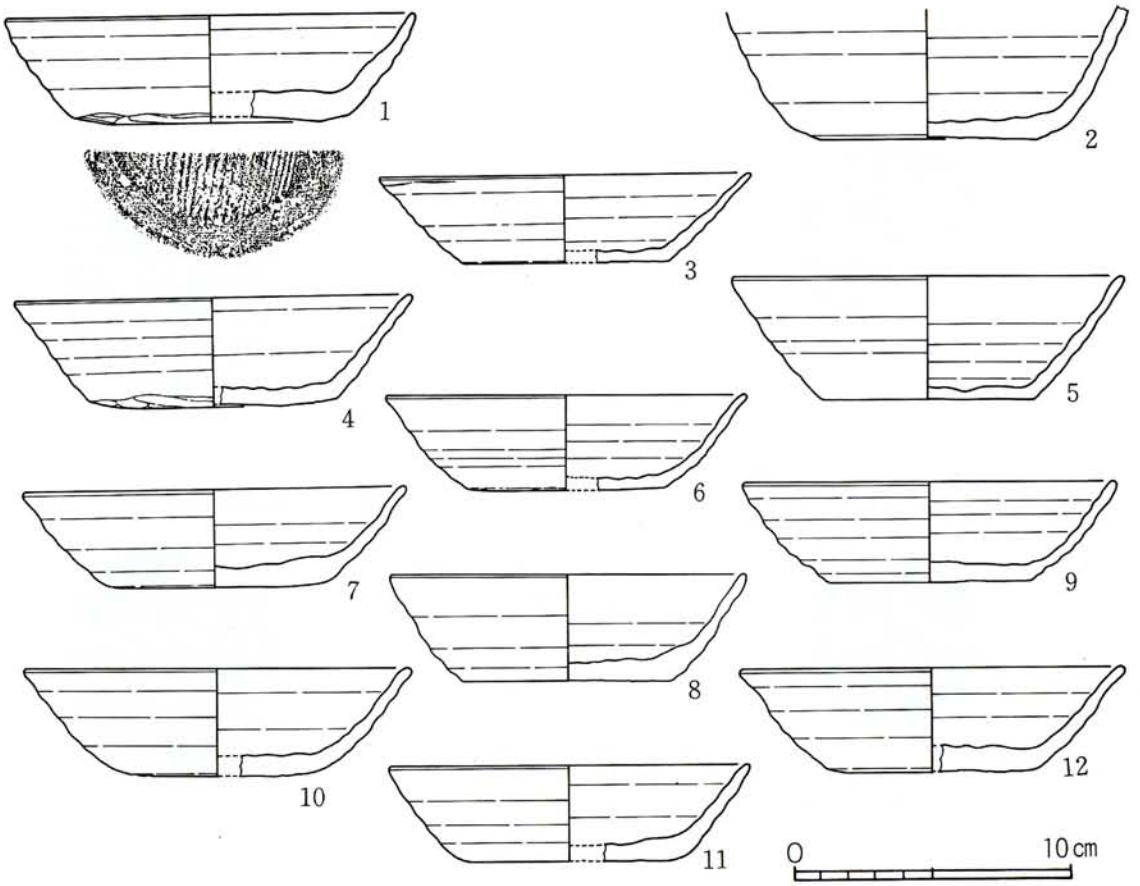
２は口縁部を欠損しているが底径7.9cm、器高は残存部だけでも4.9cmを計る大形のものである。底部中頃より体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整を施しているが、焼成が不良で磨滅のため明瞭でない。

Ⅲ類：回転ヘラ切りの後、手持ちヘラケズリ調整を施しているもの（第14図４）。

図示できるものは１点だけである。推定口径14.6cm、底径9.0cm、器高4.0cmを計る。底部全面に手持ちヘラケズリ調整を丁寧に施している。底部はやや丸底気味であるが体部との境に明瞭な稜を有する。

Ⅳ類：底部を手持ちヘラケズリ調整しており切り離し痕跡が不明なもの（第14図５）。ナデ調整を施して、切り離し痕跡を消しているもの（第14図６）。

破片で２点出土している。製作手法からすれば、Ⅲ類に属するものであろうか。器体の約½を残存している（５）は、底部全体に丁寧にケズリを施しており、平面的な底部に仕



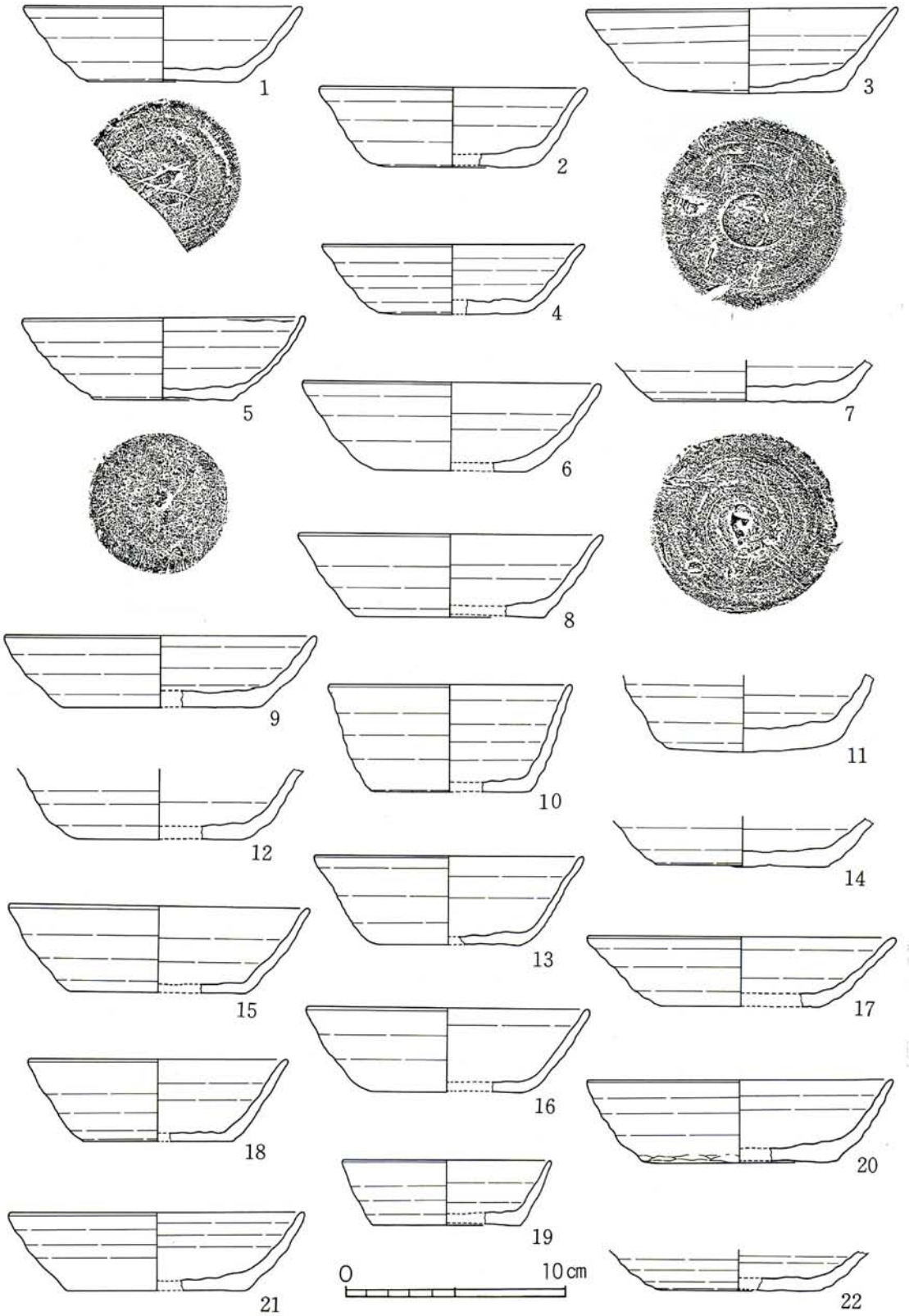
第14図　堆積土出土遺物

上げている。体部はやや内湾気味に立ち上り、直線的に外傾して口縁部に至っている。6は、口径13.2cm、底径7.2cm、器高3.4cmで、(5)に比べてやや小形を呈するものである。

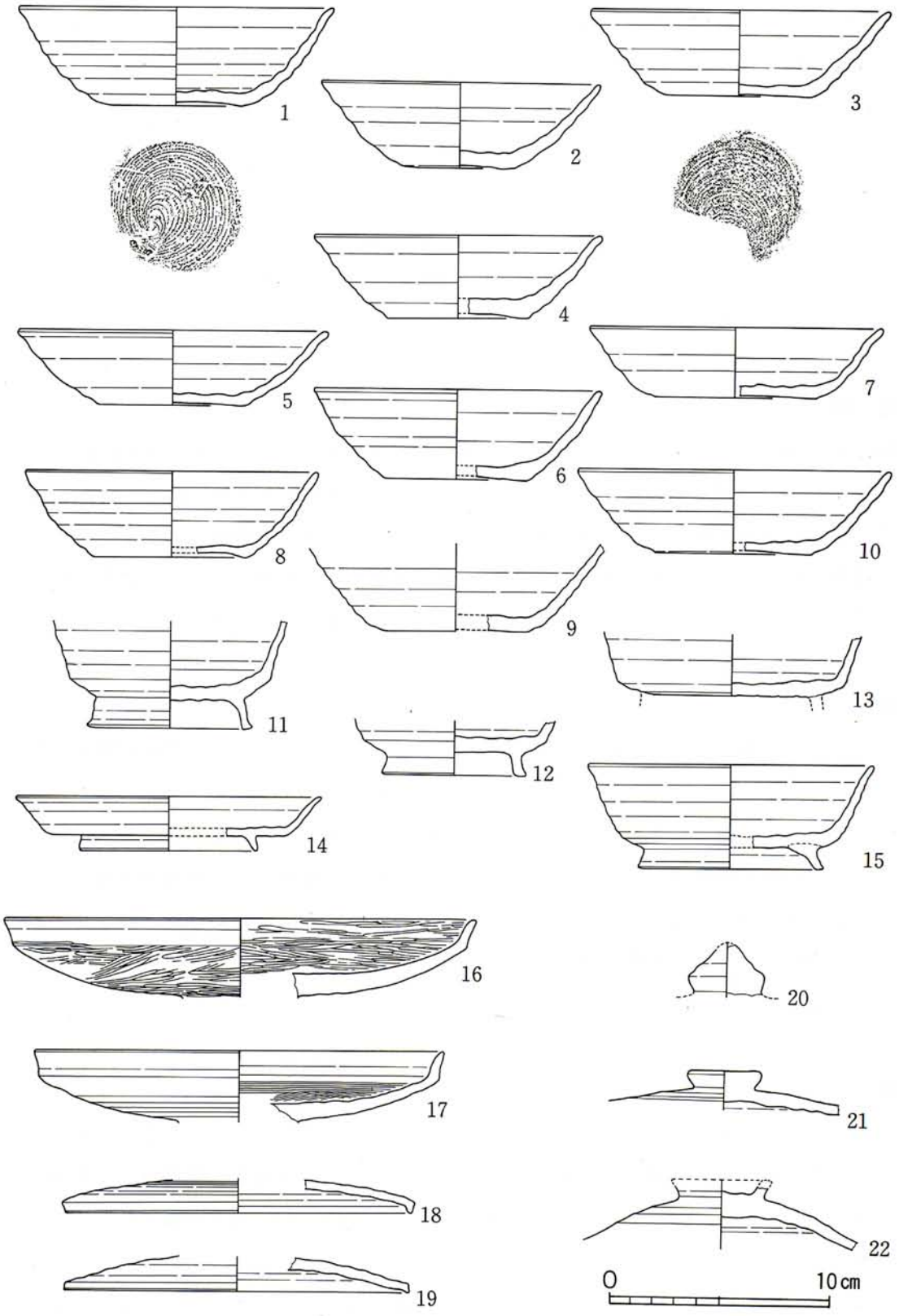
Ⅴ類：回転ヘラ切りの後、ナデ調整を施しているもの（第14図7～12、第15図1～22)。

遺構内出土のものを含めて、杯の主体を占める。図示できたものだけでも28点を数える。口径は9.6～14cm、底径6.5～8.0cm、器高3.2～4.9cmの間に測定値が集中している。(a)底部の中心にはヘラ切りの痕跡が明瞭に残り、底部周縁のみをナデ調整しているもの(第14図7～12、第15図1～14)、(b)底部全体をナデ調整して、切り離し痕を消しているものがある（第15図15～22)。体部はほとんどの個体が、直線的に外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に至るが、口縁部で僅かに外反するものもみられる。

Ⅵ類：回転糸切り後、無調整のもの（第16図1～10)。Ⅴ類について出土量の多い分類である。口径13～14.5cm、底径6～7cm、器高3.5～4.5cmの間に測定値が集中している。口径に比べ、やや底径が小さいという特徴を示す。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反するものと、直線的に外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に至るものに分けられる。底部は全て上げ底気味のものである。



第15図　堆積土出土遺物



第16図　堆積土出土遺物

〈高台付杯〉

高台付杯は、11点が出土しているが図示できたものは５点だけである（第16図11～15)。形態上から分類すると、（ａ）体部下方で「く」の字状に屈曲して稜を形成し、体部は垂直気味に立ち上がるもので、高さ1.0～1.5㎝の比較的高い高台が付くもの（11～13）、（ｂ）体部下方が「く」の字状に屈曲するが、稜をもたず、体部は外方に開きながら立ち上がるもので、高さ７㎜前後の低い高台が付くもの（14)、（ｃ）体部下方は緩いカーブをもって内湾気味に立ち上がり、高台は、底部との接合部分に付くもの（15）に分けられる。これらは、いずれもロクロ成形後、体部下端に回転ヘラケズリ調整が行われており、高台を付けた後、ナデ調整を施している。

〈高　杯〉

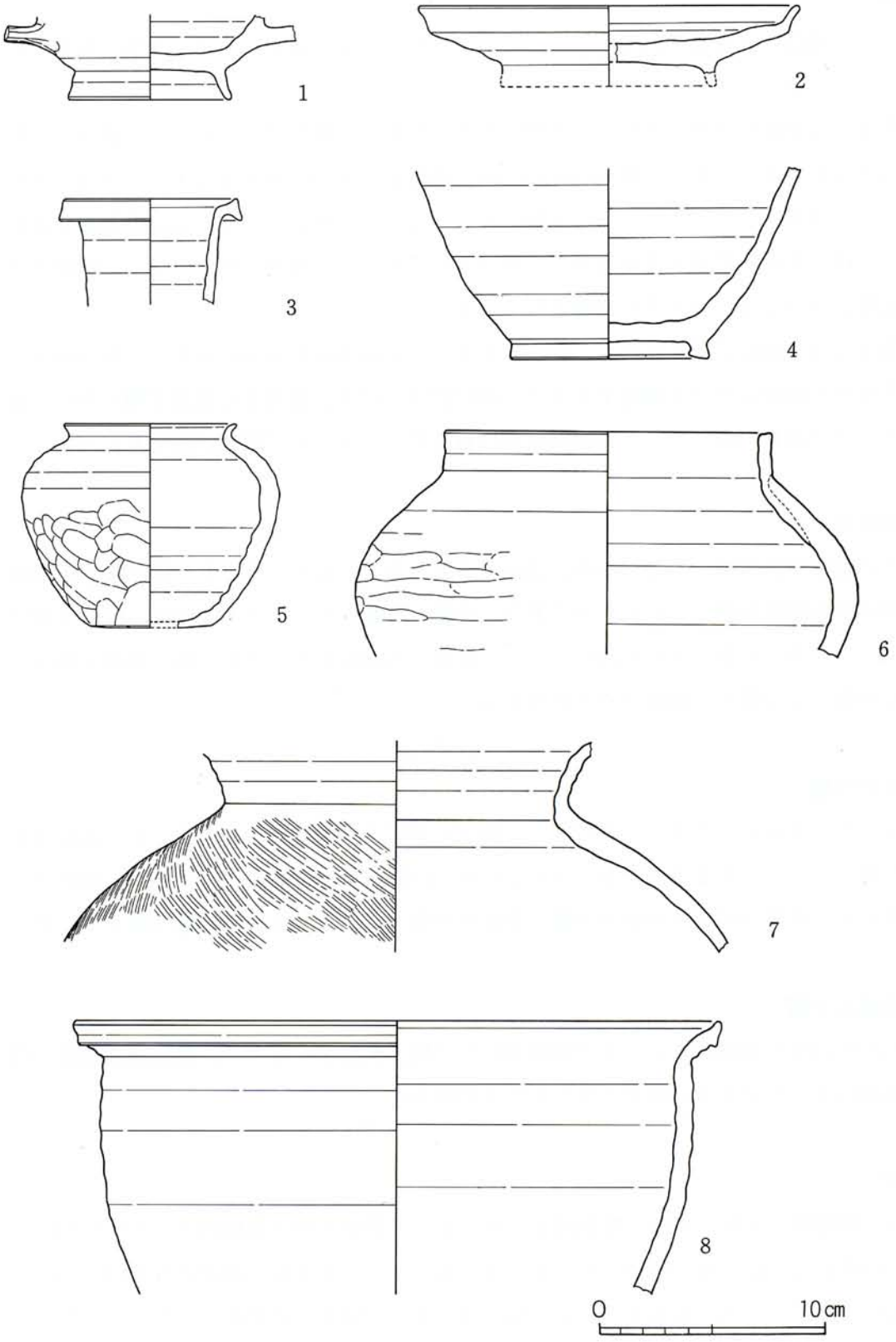
高杯は第５層から２点出土しており、いずれも脚部を欠損している（第16図16・17)。体部は丸味をもち、口縁部との境に稜を形成する。口縁部は屈曲して外反気味に立ち上がるものである。16は内外面にヘラミガキが施されているものである。色調は赤褐色を呈する。17は、前者に比べ、やや小形のものである。外面は体部下方で回転ヘラケズリ調整が施され、内面には不定方向にヘラナデが施されている。色調は青灰色を呈する。

〈蓋〉

蓋は、全体の形態がわかるものは出土していない。図示したものには天井部が扁平なもの（第16図18・19）と、天井部に丸味をもつもの（第16図22）とがある。前者はつまみ部が欠損している。18は天井部に回転ヘラケズリ調整が施され、口縁端部でほぼ垂直に短く折れ曲がり、19は屈曲せずにそのままおさまるものである。後者は、口縁部が欠損しているが、つまみ部は僅かに残存しており、その形からリング状のつまみがつくものである。天井部には回転ヘラケズリ調整が施されている。この他、つまみが宝珠形を呈するもの（第16図20）と扁平な擬宝珠形のもの（第16図21）とがある。

〈甕〉

杯類について出土量が多いが、ほとんどが破片であり図示できるものは少ない。第17図７は最大径を体部にもち、体部が球形を呈するものである。口縁端部と体部以下を欠損しているため、全体の器形は不明である。体部外面には全面的に平行叩きが施されている。第17図８は最大径を口縁部にもち、鉢形を呈するものである。口縁部は「く」の字状に短く外方へ開き、体部には、ロクロ成形による段が明瞭に残るものである。この他、口縁部破片の中に、櫛描き波状文を施したものがみられる。



第17図　堆積土出土遺物

〈壺〉

壺は、短頸壺と長頸壺が出土している。いずれも大部分が破片のため、全体の器形がわかるものは少ない。

短頸壺には比較的大形のものと、小形のものとがある（第17図５・６）。６は直立した短い口縁部をもつものである。推定口径14.6cm、体部最大径22.4cmを計るものである。外面は肩部から体部にかけてヘラケズリが施されている。５は推定口径7.7 cm、体部最大径11.5cm、底径5.4 cm、器高9.1 cmを計る小形のものである。口縁部は短く外反し、体部下半から底部にかけてはヘラケズリが施されている。

長頸壺には口縁部で強く外反し、端部で上下につまみ出されるものがある（第17図３）。体部下半から底部にかけて残存するもの（第17図４）には、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整が施され、その後高台を付着させ、ロクロナデ調整が施されている。

〈双耳杯〉

把手の破片は数点出土しているが、図示できたものは１点だけである（第17図１）。口縁部と把手の先端を欠損しているものである。体部は丸味をもって立ち上がり、体部下端にヘラケズリを施した把手を貼り付けている。底部には回転糸切りの切り離し痕跡が残る。高台は外側にふん張り、端部でやや外反する。

〈高台付盤〉

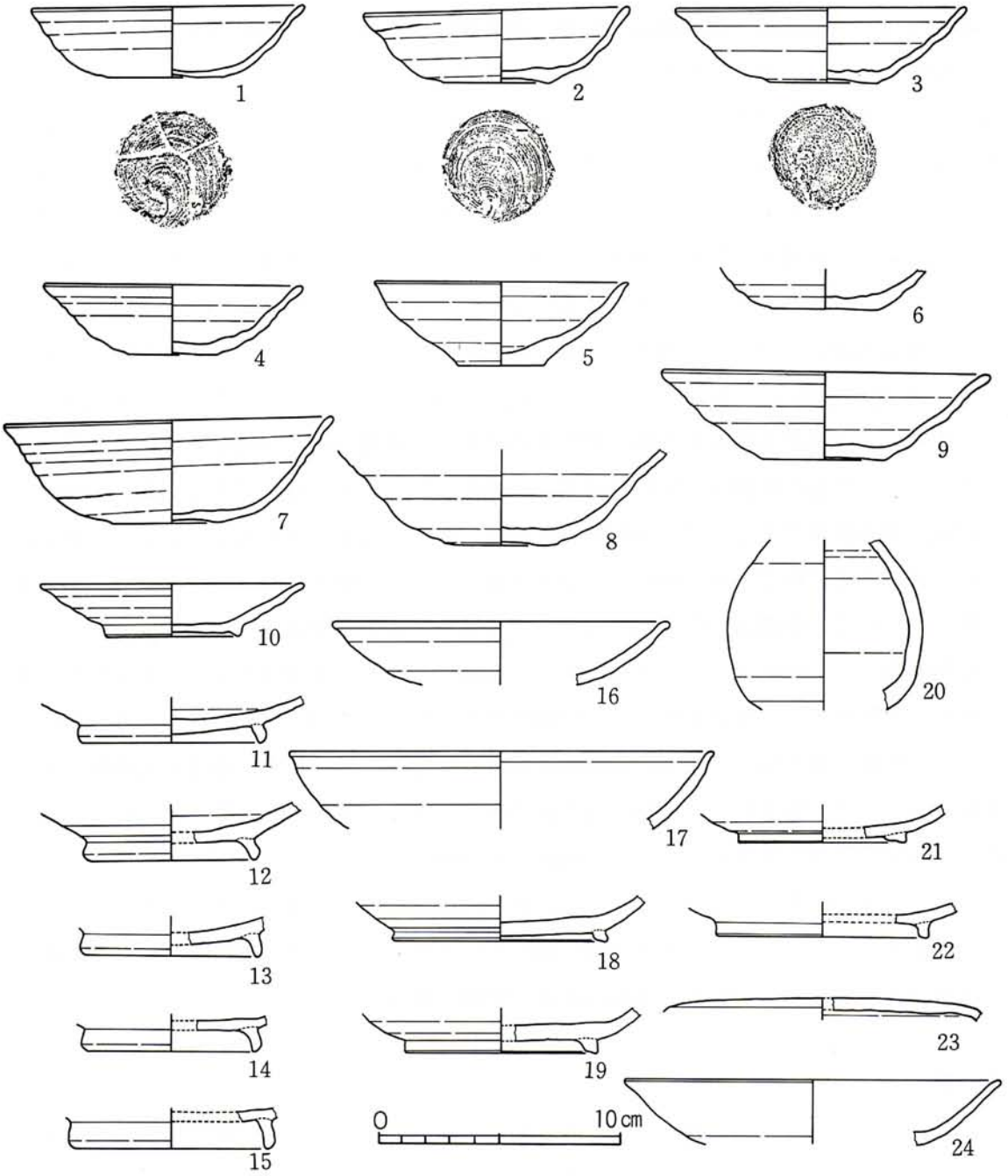
図示できるものが１点ある（第17図２）。推定口径17.1cmを計るものであるが、高台の先端を欠損している。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は稜を形成して屈曲し、端部でやや外反する。底部は回転ヘラ切りの後、高台を付着させ、ロクロナデ調整を施している。

(3) 赤焼き土器

杯と高台付杯の器種がある。全て回転糸切りの後、無調整のもので、色調は浅黄色、橙色、明褐色などを呈する。図示できたものは10点ある。

〈杯〉

杯は、形態的に小形のもの（第18図１～６）と、大形のもの（第18図７～９）とがある。前者は口径10.4～12.0cm、底径3.6～4.9 cm、器高2.9～3.5 cm、後者は口径13.6～13.7 cm、底径4.5～5.0 cm、器高3.7～4.5 cmの間に全ての個体の測定値がおさまる。両者とも口径に対する底径の比が小さなものである。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部で外反するものが多い。口縁端部には先細るものと、ややふくらみをもって丸くおさまるもの



第18図　堆積土出土遺物

とがある。

〈高台付杯〉

口径10.8cm、底径5.6cm、器高2.2cmを計り、皿状を呈する扁平なものである（第18図10）。底部には、削り出しによると思われる高台が付けられている。

(4)　陶磁器

陶磁器は、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、中世陶器、近世以降の陶磁器が出土している。

灰釉陶器は、皿、椀、小形瓶、長頸瓶などの破片で、計14点出土している。第18図11～14は、皿の底部破片である。底部をヘラ切りしたのち三ケ月形の高台を付けている。釉は、内外面ともに体部に施されており、内面底部にまで及んでいるものは見られない。色調は、内外面とも灰白色を呈し、焼成、胎土ともに堅緻である。第18図5は、三ケ月形の高台を持つ皿か椀である。底部内面に重ね焼きの痕がみられ、その内側にも薄く釉を塗っている。第18図18・19は、角高台を付けた椀の底部破片で、底部をヘラ切りしたのちに高台を付けている。底部内面は、緑灰色の釉が厚く塗られている。外面の色調は、灰白色を呈し、焼成胎土とも堅緻である。第18図16・17は、椀の口縁部破片である。体部より内湾気味に立ち上がり、口縁部で丸味をもち外に開くものである。体部内面と口縁部付近に釉が薄く塗られている。外面の色調は、灰白色を呈し、焼成、胎土ともに良好である。第18図20は、小形瓶の体部破片である。同一個体の肩部破片に把手の付着がみられることから、把手付き瓶と思われる。体部下端に回転ヘラ削りを施している。釉は体部外面の中位より上方部に塗られている。色調は、内外面とも灰白色を呈し、胎土や焼成は、堅緻である。

緑釉陶器は、13点出土しているが、すべて小破片である。第18図23は、つまみのない蓋の破片と思われる。全体が丁寧にロクロ調整されており、外面の口縁部付近に僅かに稜をもつ。内外面に釉を施している。断面の色調は、灰色を呈し、胎土、焼成とも堅緻である。第18図21・22は、角高台をもつ椀か皿の底部破片である。内外面とも釉が塗られている。断面の色調は、灰白色を呈し、胎土、焼成とも堅緻である。

白磁は、椀の破片が2点出土している。第18図24は、椀の口縁部の破片である。体部より内湾気味に立ち上がり、口縁部で外に開くものである。内外面に施釉されている。断面の色調は灰白色を呈し、胎土や焼成は非常に堅緻である。

(5) 瓦

瓦は、調査区全域から総数約1250点ほど出土しているが、すべて小破片である。種類は軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦であり、他に文字瓦がある。

〈軒丸瓦〉

軒丸瓦は、4点出土しているが、意匠のわかるものは1点だけである。

第19図1は、重弁蓮華文軒丸瓦でⅣ区の第5層より出土した。花弁と外縁だけの小破片である。外縁は直立縁で、瓦当部の裏と外縁の側面に縄目痕がみられる。胎土は粗いが、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈している。

第19図2・3は、瓦当と丸瓦の接合部分の破片である。瓦当部裏面に丸瓦と接合するた

めに、瓦当部裏面に溝を掘り、そこへ丸瓦の広端部を挿し込み、内外面に粘土を付加している。外面はナデや削り調整を施している。

〈軒平瓦〉

軒平瓦は、単弧文軒平瓦１点がⅤ区の第５層から出土している（第19図４）。顎面には縄叩き目の痕が残り、凹面ではスリ消されているが、布目が残っている。胎土、焼成ともに悪く明褐色を呈している。

〈平　瓦〉

今回の調査で出土した平瓦は、およそ600点を数える。

平瓦を叩きの原体・製作や調整の技法等により観察すると次のようになる。

(1) 凸面は、格子叩きが施され、凹面には布目痕が残るもので、側端部が折れ曲がる特徴をもつもの（第19図５）。

(2) 両面ともナデを施しており、凹面に桶巻痕が見られるもの（第19図６）。

(3) 凸面は、縄叩きを行ったのちにナデを施しているが、縄叩き目が残り、凹面は、指か工具のような物でナデを施しているもの（第19図７）。

(4) 凸面は、縄叩きを施しているが、縄目が潰れており、凹面は、布目をナデ消しているもの（第19図８～20、第20図１～18）。

(5) 凸面は、縄叩きを施しているが、縄目が潰れており、凹面には布目痕の残るもの（第21図１～14）。

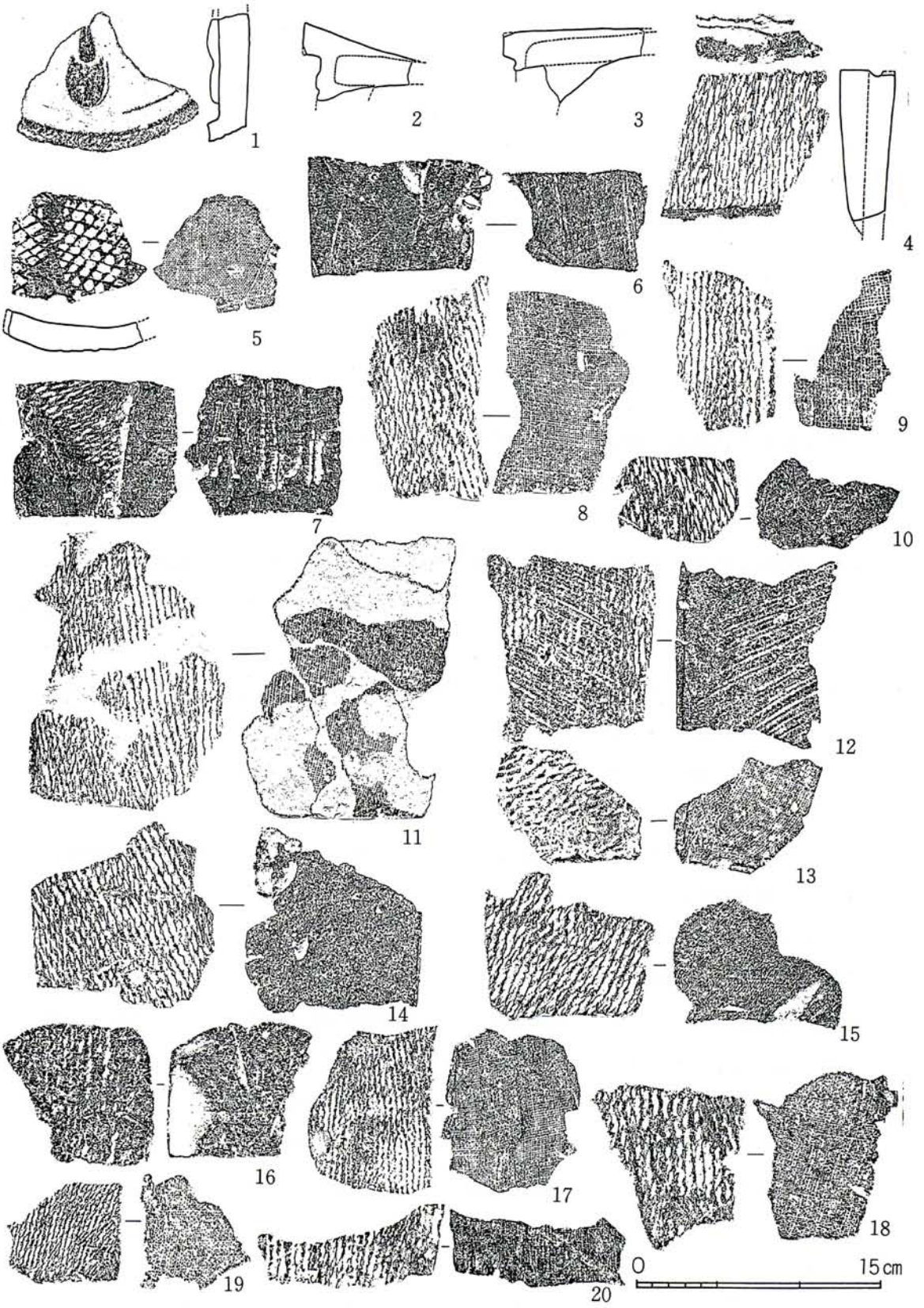
(6) 凸面は、縄叩きを施し、凹面には布目痕が残るもので、両面ともに再調整を施さないもの（第21図15～18）。

以上６種類に分類することができた。これを多賀城跡と対比すると、第１・２・３類は、多賀城の創建期に類例を求められる。第４・５類の中に赤褐色を呈するものや、胎土に特徴のある瓦があり、これらは多賀城跡出土の第Ⅱ期の瓦に相当するものである（第19図８～20、第20図１～６）。また、凸面の側端部が調整の段階で僅かに高まる特徴をもつものと、灰や自然釉のかかる特徴をもつものがあり、これは多賀城の第Ⅲ期に相当するものである（第20図７～18、第21図１～14）。第６類は多賀城の第Ⅳ期の瓦に相当する。

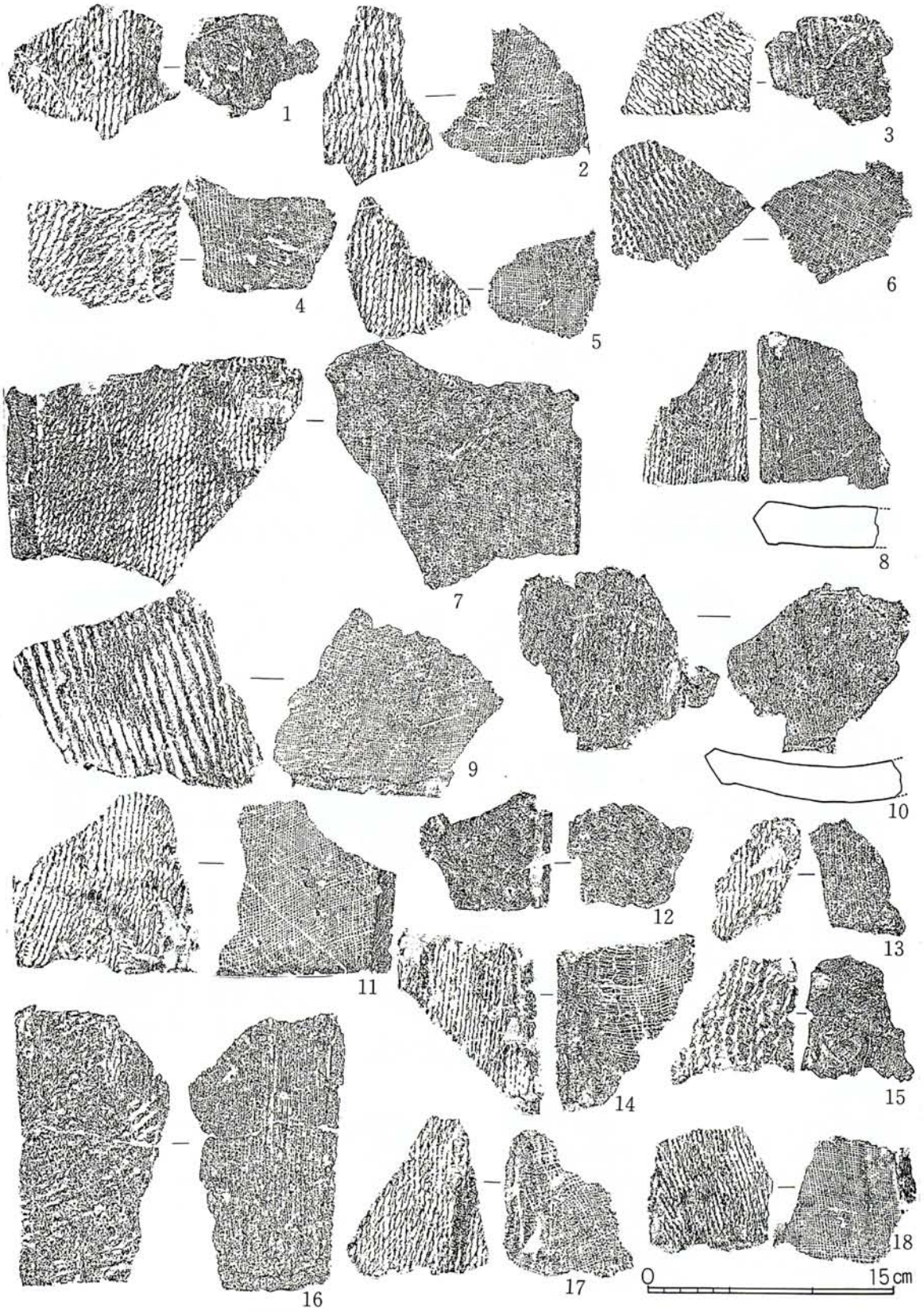
他に特徴的なものとして、凸面に調整台圧痕が残るものがある（第21図14）。

〈丸　瓦〉

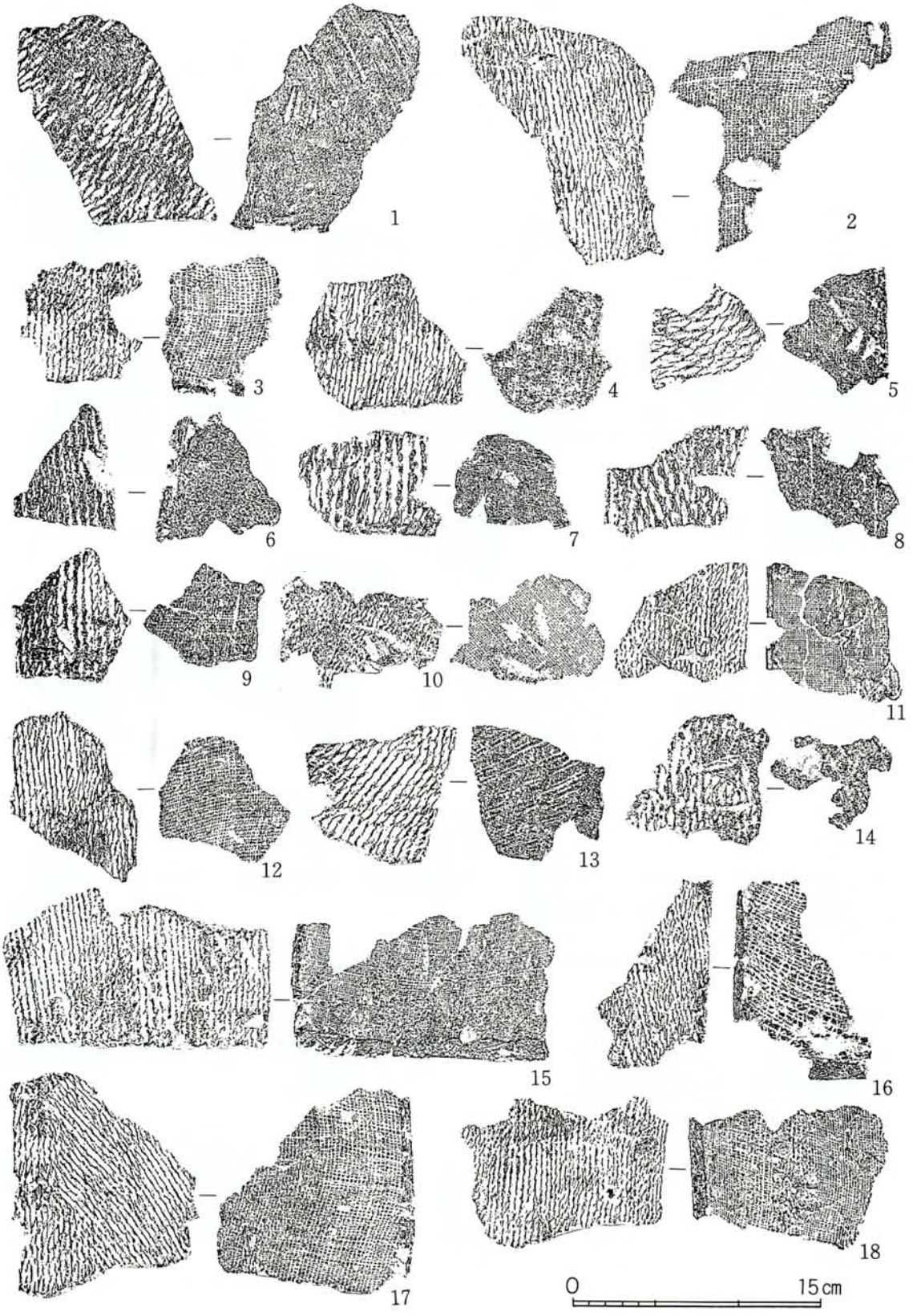
丸瓦は650点出土している。凸面の叩き目痕や、整形の技法から観察すると、一つは、平行線状の叩き目が残るもの（第22図１～３）と縄叩きを行った後、ロクロナデ成形を施



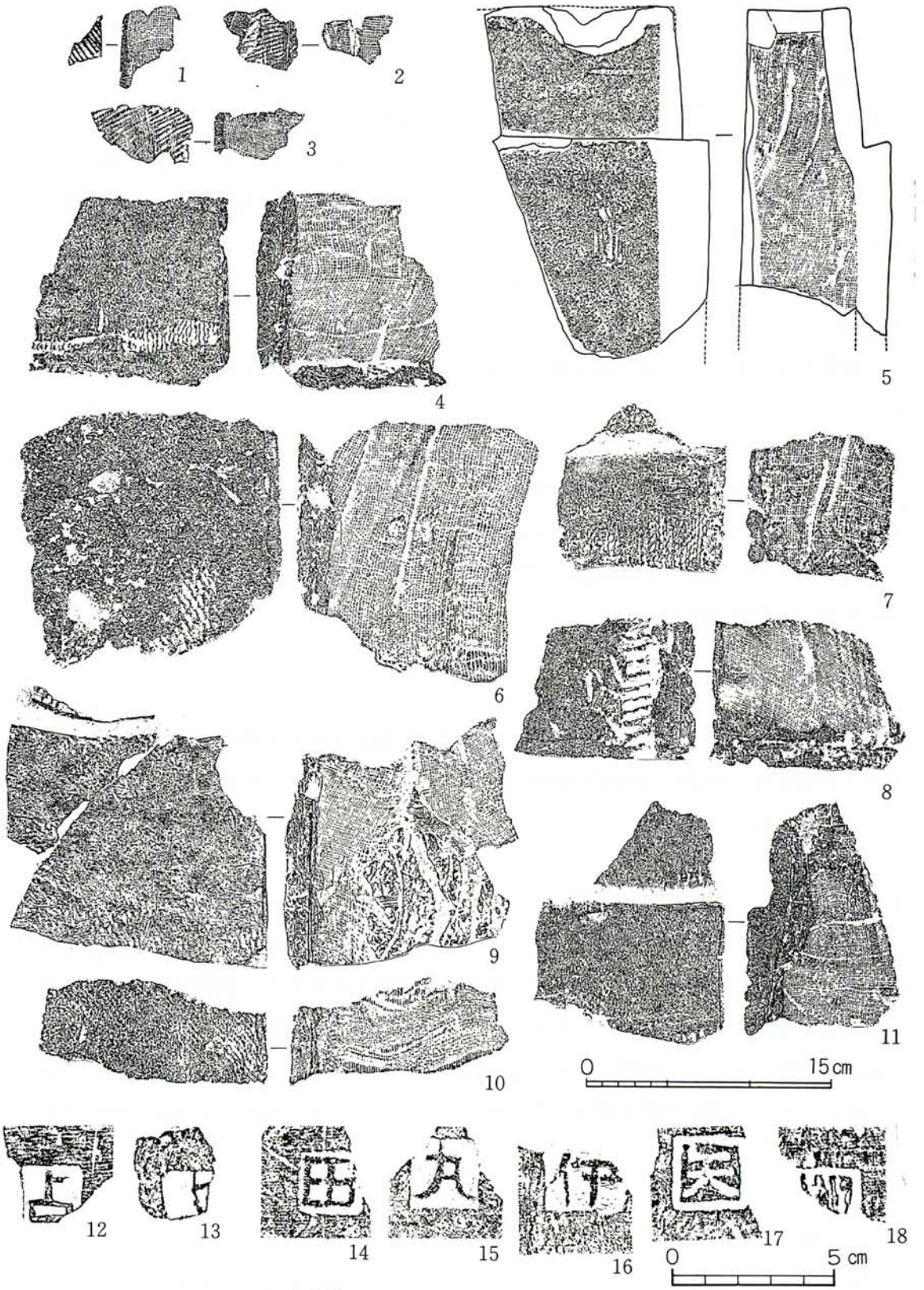
第19図　堆積土出土遺物（瓦拓影）



第20図　堆積土出土遺物（瓦拓影）



第21図　堆積土出土遺物（瓦拓影）



第22図堆積土出土遺物（瓦拓影）

したものとが見られる（第22図４～11）。

〈文字瓦〉

文字瓦は、刻印文字瓦である（第22図12～17）。種類は、「占」が２点、「田」・「丸」・「伊」・「矢」が各１点の計６点である。「占」・「田」・「伊」は、丸瓦の凸面に刻印され、「丸」・「矢」は、平瓦の凹面に刻印されている。「矢」は、陰刻である。他に、丸瓦の凸面に刻印の記号瓦が１点ある（第22図18）。

(6) 硯

円面硯がⅤ区第３層および第５層から３点、風字硯はⅤ区の第５層から１点出土している。

〈円面硯〉

硯部と裾部を欠損しているもの（第23図１・２）と、裾部の破片（第23図３）がある。前者は陸と海の区別が比較的明瞭なものであるが、どちらも胎土がやや粗く、使用痕跡などは観察できなかった。１は台部に円形と思われる透しが僅かにみられる。３は沈線文が描かれているものである。

〈風字硯〉

破片のため全体の形状は不明である（第23図４）。硯部はかなり磨滅しており、使用の形跡がうかがえる。外面には脚部の破損の痕跡がみられる。また、器面の調整痕としてヘラケズリが施されている。

(7) 砥　石

砥石は、調査区全域より出土している。第23図10は、Ⅳ区の第５層より出土したもので、表面と両側面が研磨され、特に側面には多くの使用痕がみられる。第23図５・７・９は、Ⅴ区の第５層より出土したものである。５は、端部に径0.3㎝程の孔が穿たれているが、研磨面が剝離しており、使用した痕跡は不明である。他の２点は、かなり使用されている。第23図６・８は、Ⅵ区の第３層及び第５層から出土している。両者ともかなり使用された痕がみられる。

(8) 土　錘

土錘は、Ⅴ区の第４層より１点のみ出土している（第24図１）。管状を呈するもので、一部欠損している。残存している長さは、3.0㎝、中央部の径が1.1㎝、穿孔の径が0.4㎝を

第23図　堆積土出土遺物（瓦拓影）

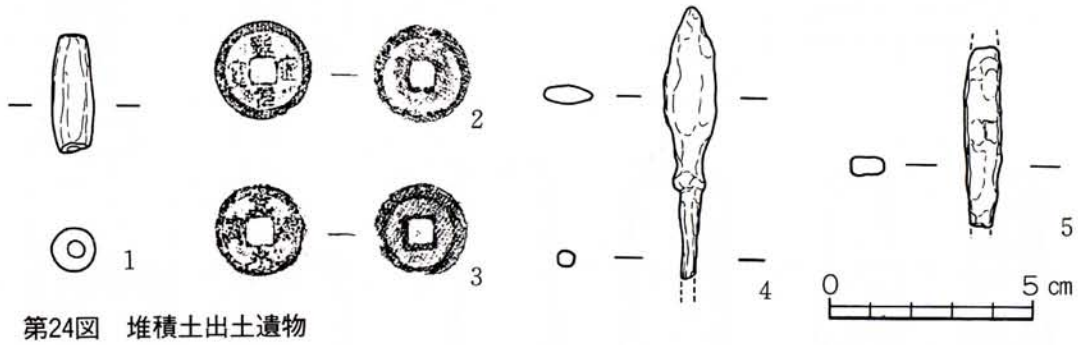
計る。

(9) 古　銭

古銭は、２点出土している。第24図２は、北宋銭の「熙寧元宝」（1068年鋳造）で、Ⅵ区のピット１より出土している。第24図３は、「寛永通宝」で、Ⅴ区の第３層より出土している。

(10) 鉄製品

鉄製品は、調査区全域より多数出土しているが、形態の不明なものが大部分である。第24図４は、有茎の鉄鏃で、Ⅳ区の第４層より出土している。



第24図　堆積土出土遺物

Ⅶ　ま　と　め

今回の調査は、前年度に引き続き市川字伏石地区の遺構確認調査として実施したものである。このため、発見遺構については掘り込み調査を実施していない。本稿において、遺構の詳細について述べることはできないため、ここでは、簡単に調査結果をまとめることにする。

発見された遺構は、竪穴遺構１基、畦畔遺構５条、道路状遺構１条、そして多数の溝跡・土壙・ピットがある。Ⅴ区で発見した道路状遺構と１・２号溝跡は、昨年度の調査区であるⅢ区において発見した道路状遺構と18・19号溝から連続する遺構である。また、Ⅲ区の北西部コーナーで発見していた畦畔遺構は、Ⅴ区の１号畦畔遺構に続くことが今回の調査で確認することができた。

今回、発見された畦畔遺構や道路状遺構、さらに溝の一部は、昨年発見した畦畔遺構や溝跡と同一方位を持ち、多賀城の中軸線に基づいて構築された可能性が一層強く考えられる。

条里制の土地区割については、昨年度発見したⅡ区の畦畔遺構より一筆の規模が、おそらく8間×7間と推定することができた。しかし、一坪の規模等については、調査区の制約から追求することはできなかった。

出土遺物は、多量の瓦類や土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁などの他に円面硯、古銭、鉄製品など、調査区全区から多量の遺物が発見された。

出土した遺物の傾向をみると、瓦では、発見された重弁蓮華文軒丸瓦が、多賀城の320に相当し、軒平瓦は、640に相当する単弧文軒平瓦である。文字瓦は、多賀城のⅡ期によくみられる刻印の文字瓦である。平瓦は、多賀城の創建期からⅣ期までに相当する瓦が認められ、そのうち第Ⅱ・Ⅲ期に相当する瓦が全体の8割以上を占める。

土器類では、器種としては杯が最も多く、須恵器と土師器の出土量は3：2で須恵器が多く出土している。

土師器は、ロクロを使用しないもの（A類）とロクロを使用するもの（B類）がみられ、杯A類は、底部丸底のものから平底へ移行する。（AⅠ類→AⅢ類）時期のものと捉えられる。AⅠ類は、国分寺下層式の特徴をもつものであり、年代的には奈良時代後半～末期前後に位置づけられる。

B類では、切り離し技法や調整技法から5類に分類された。分類ごとの出土量にさほど開きはないが、全体としては、A類を大幅に上回っている。年代的にはA類に後続する時期のもので平安時代前半～中半期を中心とする時期が与えられる。

須恵器では杯の出土量が多く、製作技法から6類に分類された。底部ヘラ切りのものが主体を占めており、特にⅤ類が圧倒的に多い。

赤焼き土器は、色調が明褐色を呈し、底部を回転糸切りで切り離した後、調整が全く施されないもので、多賀城跡の「須恵系土器」に相当する。須恵器Ⅴ・Ⅵ類についで出土量の多いものである。赤焼き土器は、多賀城跡の堆積層中で10世紀前半頃に堆積したと考えられている灰白色火山灰堆積前後に出現し、それ以降、量的に主体を占めるものと解されている。この灰白色火山灰は調査地区でも随所に認められている。

以上のことから、今回の調査で出土した遺物は、奈良時代後半から平安時代後半にわたるものであるが、平安期の遺物が圧倒的に多いという特徴を指適できる。遺構の年代については、掘り込み調査を実施していないので不明と言わざるを得ないが、昨年度の調査においても灰白色火山灰堆積層が畦畔遺構を覆っていることが確認されていることから、今回検出した畦畔遺構、道路状遺構およびそれらに平行する溝跡などの大部分の遺構は、火

山灰が降下した10世紀前半以前には機能していたものと理解される。

多賀城跡周辺の遺跡群については、律令体制下における社会的制約が集落形成に及ぼす影響が、他の一般集落と比べて強かったと考えられるが、それが、実際にはどのようなものであったかについては、全く不明と言わざるを得ない。

これまで、周辺遺跡の調査が部分的にではあるが進められて来ており、多賀城跡との関連が指適されている。市教育委員会では多賀城跡をとりまく、周辺遺跡の実像を把握することに大きな目的をもっている。多賀城跡の周辺地域については、今後とも調査を継続して実施して行く所存である。

末筆ではありますが、調査に協力された地権者、佐藤忠寿氏、菊池功氏、調査器材の提供および、報告に際し出土遺物について御教示を受けた多賀城跡調査研究所、同所員の白鳥良一氏、高野芳宏氏に対し心から感謝の意を表する次第であります。

（参考文献）

1．多賀城跡調査研究所「多賀城跡」宮城県多賀城跡調査研究所年報（1980）

2．宮城県教育委員会「水入遺跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第84集（1982）

3．愛知県陶磁資料館「平安時代の土器・陶器―各地域の諸様相と今後の課題」シンポジウム発表資料（1981）

4．多賀城市教育委員会「館前遺跡」多賀城市文化財調査報告書第１集（1980）

5．多賀城市教育委員会「山王・高崎遺跡発掘調査概報」多賀城市文化財調査報告書第２集（1981）

6．多賀城市教育委員会「高崎・市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第３集（1982）

図版 1　調査地区航空写真

図版 2　調査地区全景（南東より）

図版 3　調査風景

図版 4　Ⅳ区遺構検出状況（西より）

図版 5　Ⅳ区畦畔遺構

図版 6　Ⅳ区竪穴遺構

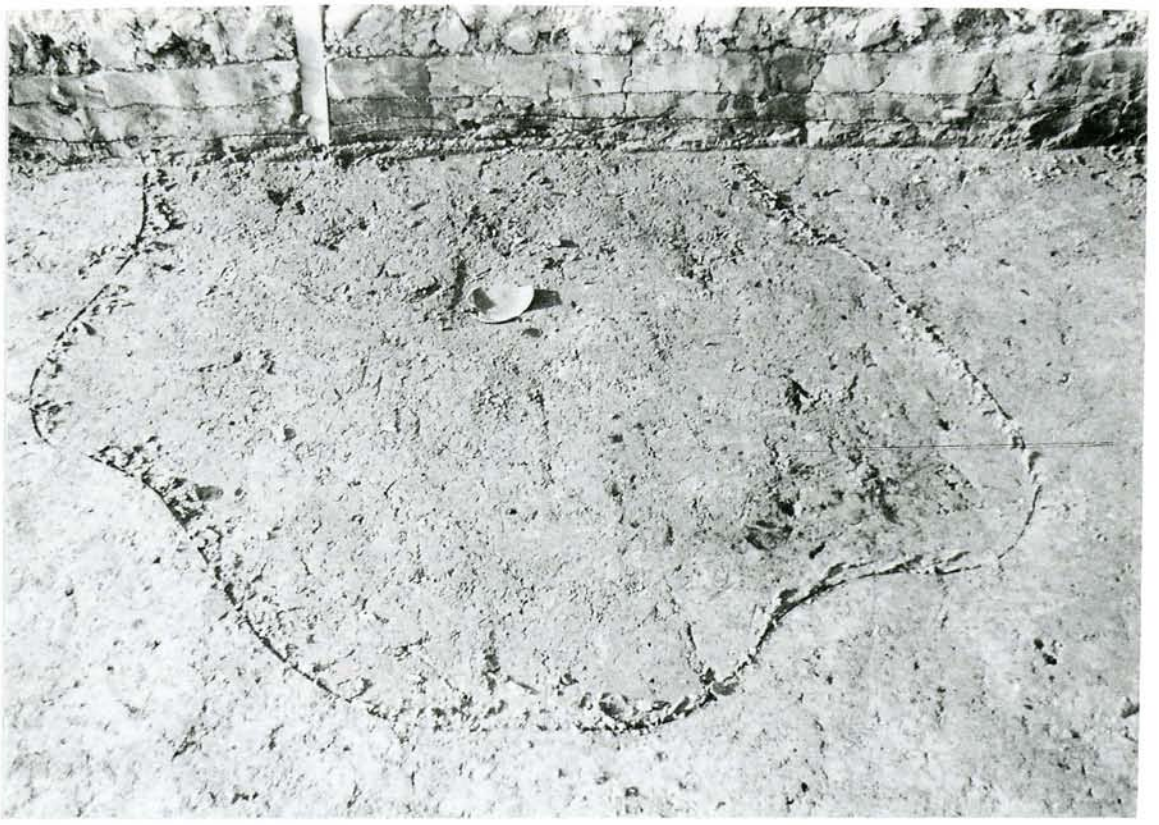
図版 7　Ⅳ区 1 号土壙

図版 8　Ⅴ区遺構検出状況（西側）

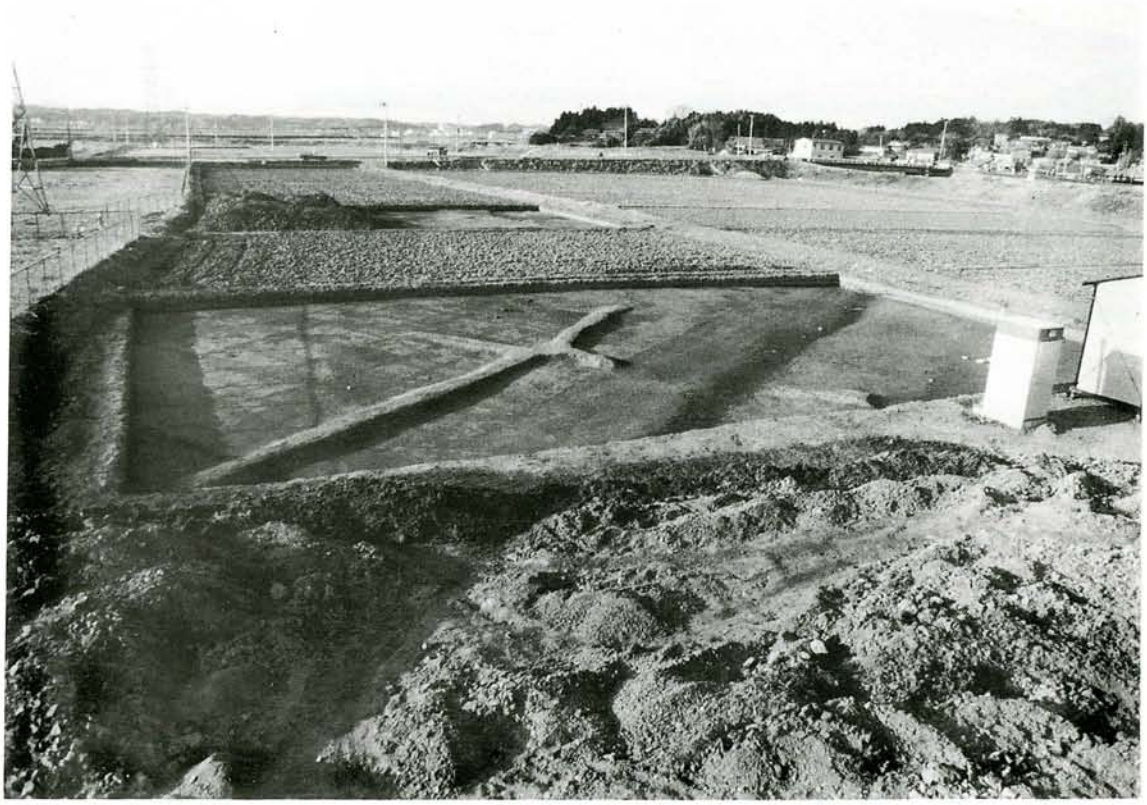
図版 9　Ⅴ区遺構検出状況（東側）

図版10　Ⅴ区畦畔遺構

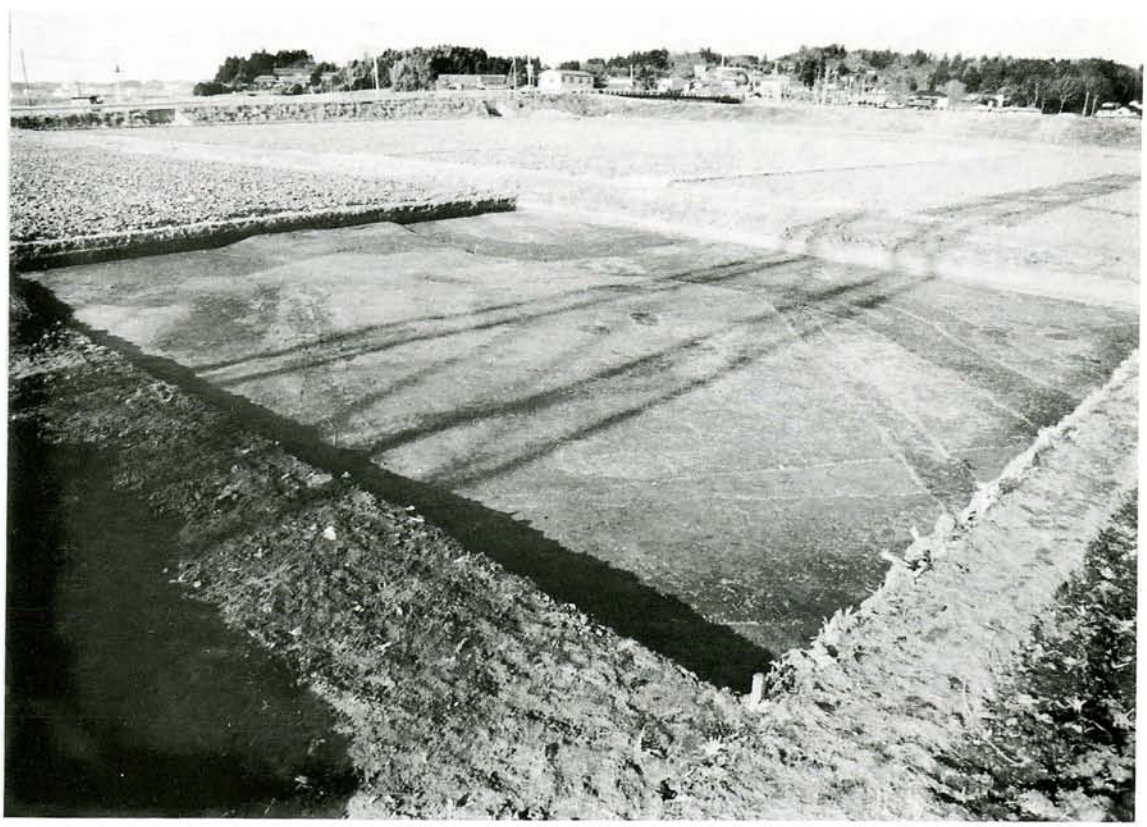
図版11　Ⅴ区土壙４～６遺物出土状況



図版12　Ⅴ区土壙１遺物出土状況



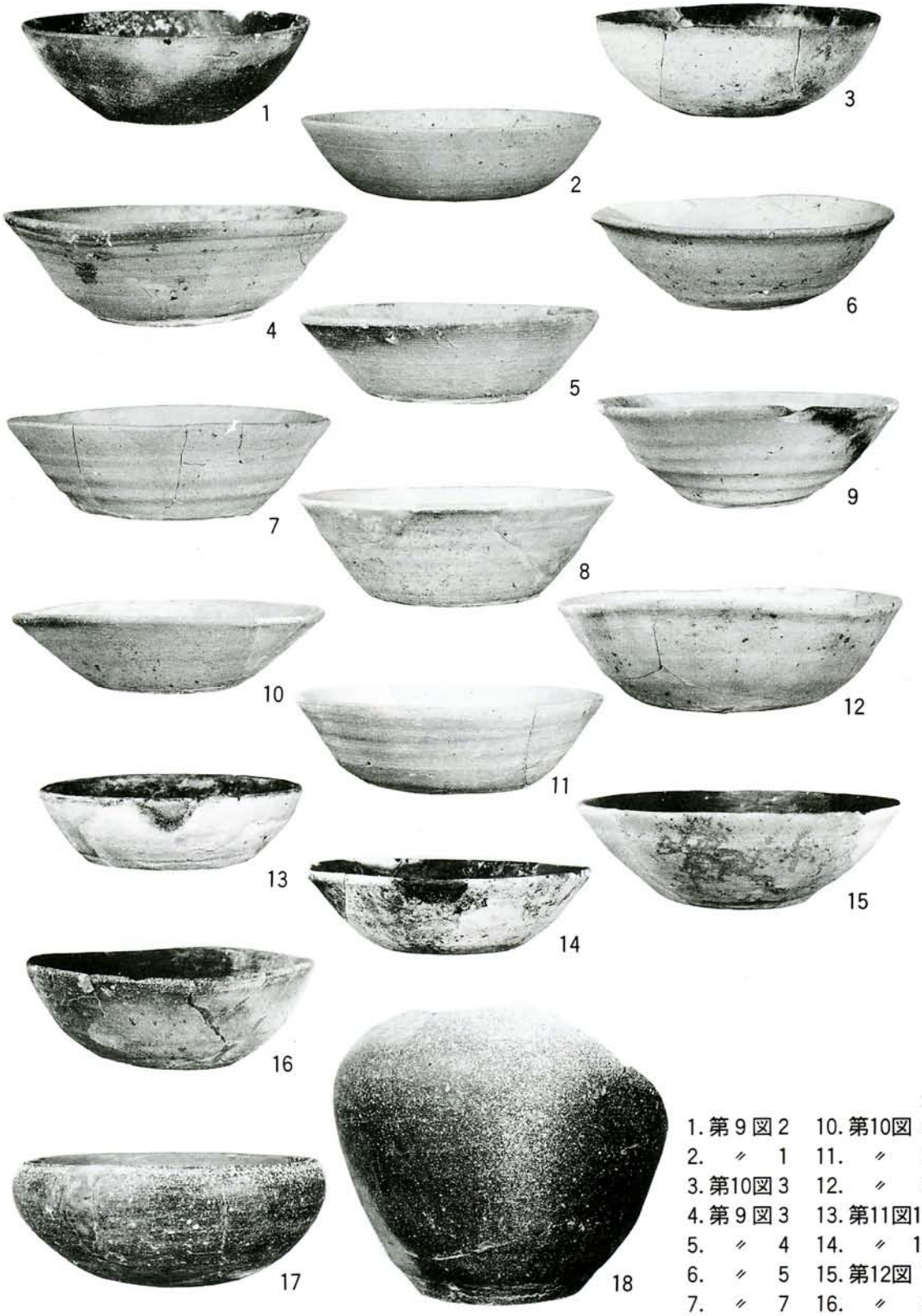
図版13　Ⅴ・Ⅵ区調査区全景



図版14　Ⅵ区調査区全景

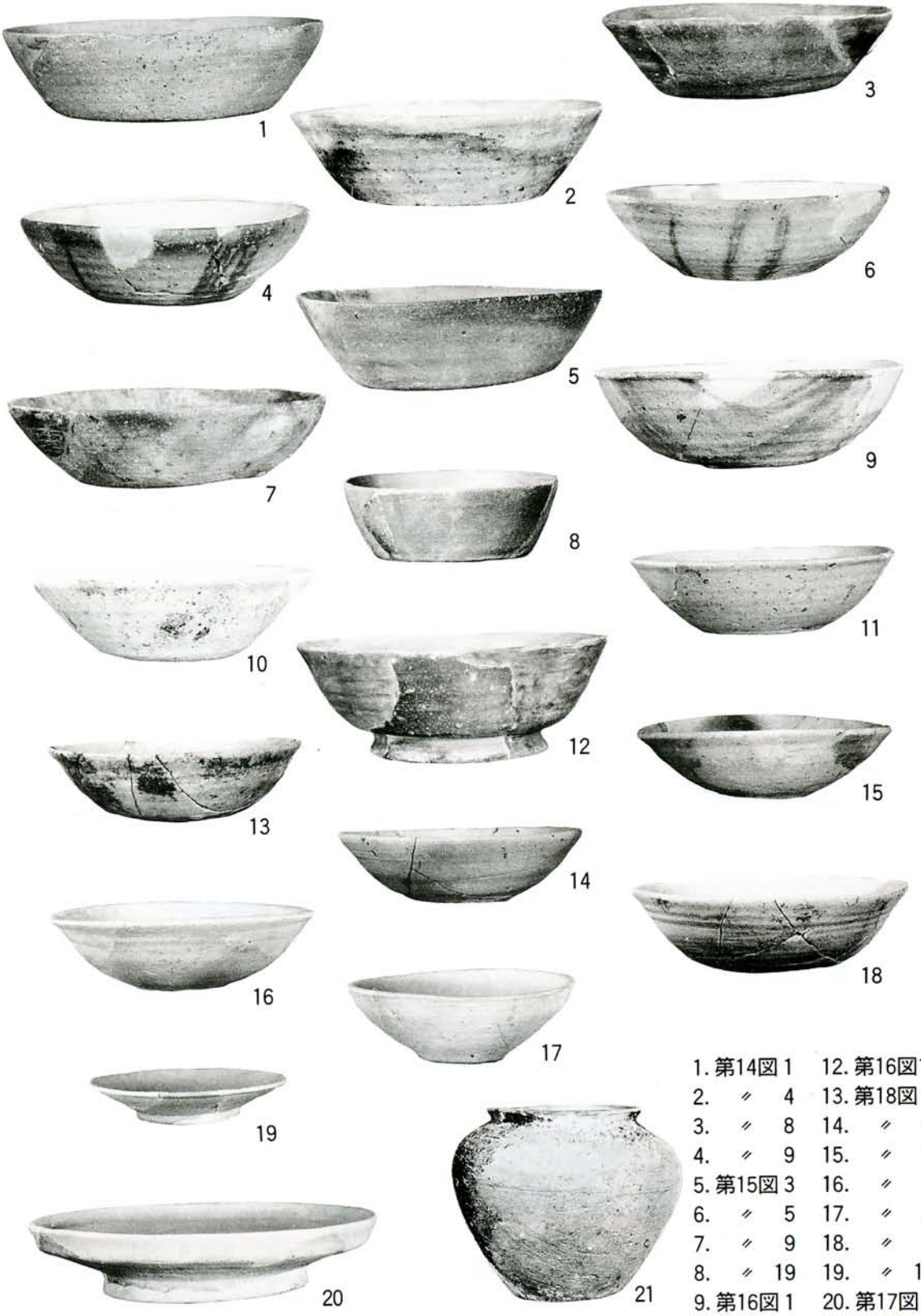
図版15　Ⅵ区遺構検出状況

図版16　Ⅵ区ピット1遺物（古銭）出土状況



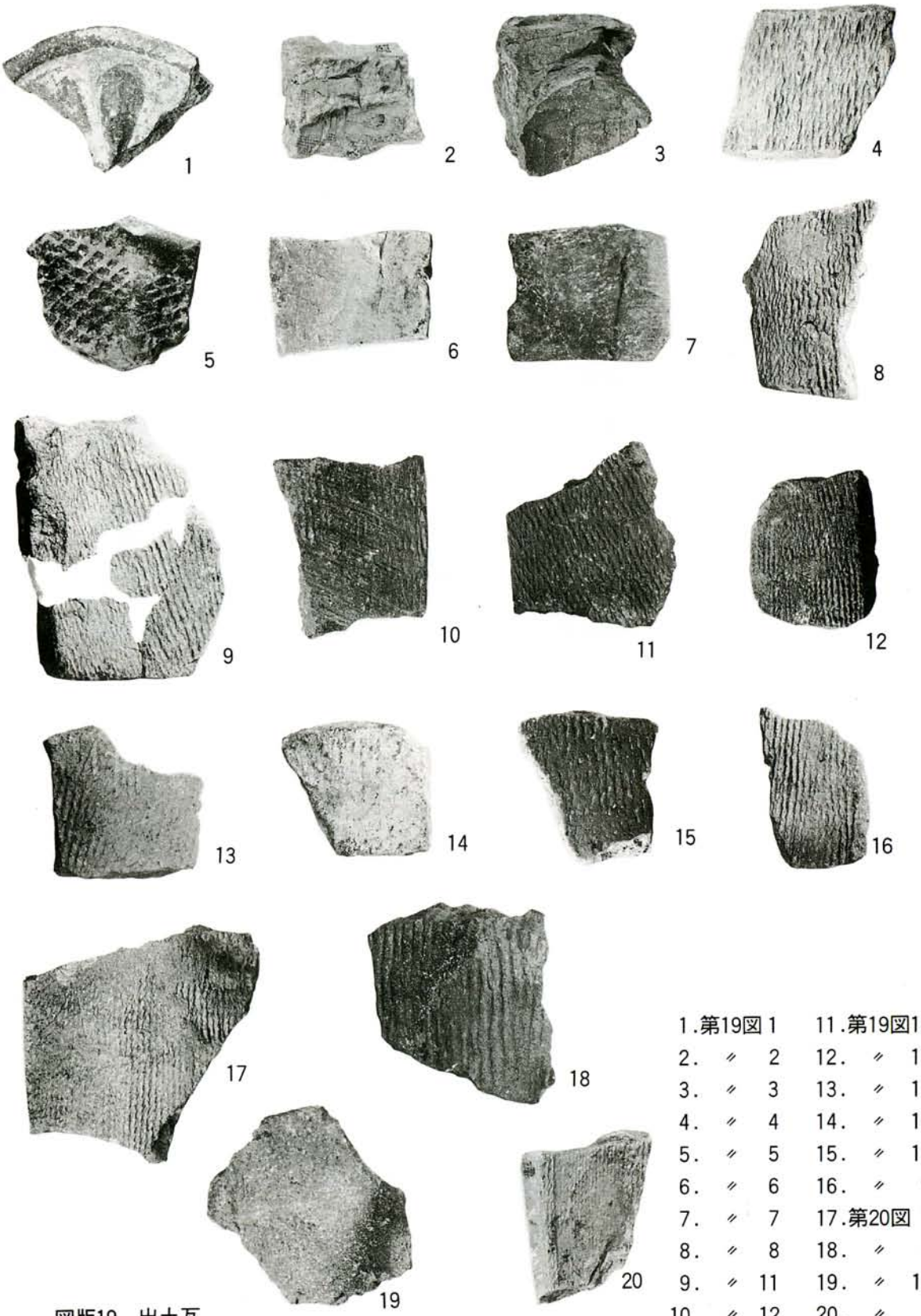
1. 第９図２　10. 第10図 4
2. 〃　1　11. 〃　9
3. 第10図３　12. 〃　5
4. 第９図３　13. 第11図10
5. 〃　4　14. 〃　12
6. 〃　5　15. 第12図 1
7. 〃　7　16. 〃　5
8. 第10図１　17. 第９図 8
9. 〃　2　18. 第10図11

図版17　出土土器



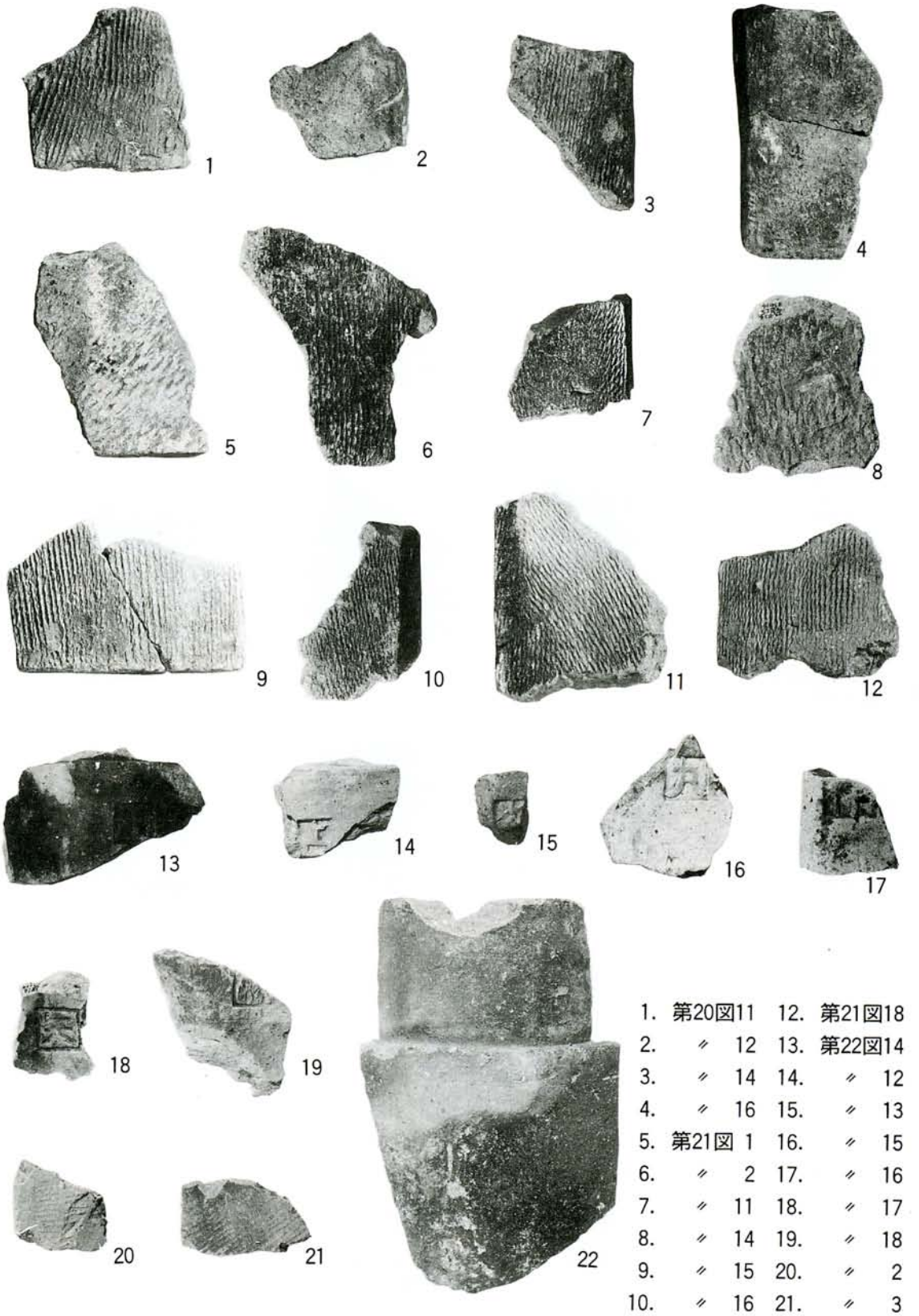
1. 第14図 1
2. 〃 4
3. 〃 8
4. 〃 9
5. 第15図 3
6. 〃 5
7. 〃 9
8. 〃 19
9. 第16図 1
10. 〃 3
11. 〃 4
12. 第16図15
13. 第18図 1
14. 〃 2
15. 〃 3
16. 〃 4
17. 〃 5
18. 〃 7
19. 〃 10
20. 第17図 2
21. 〃 5

図版18　出土土器



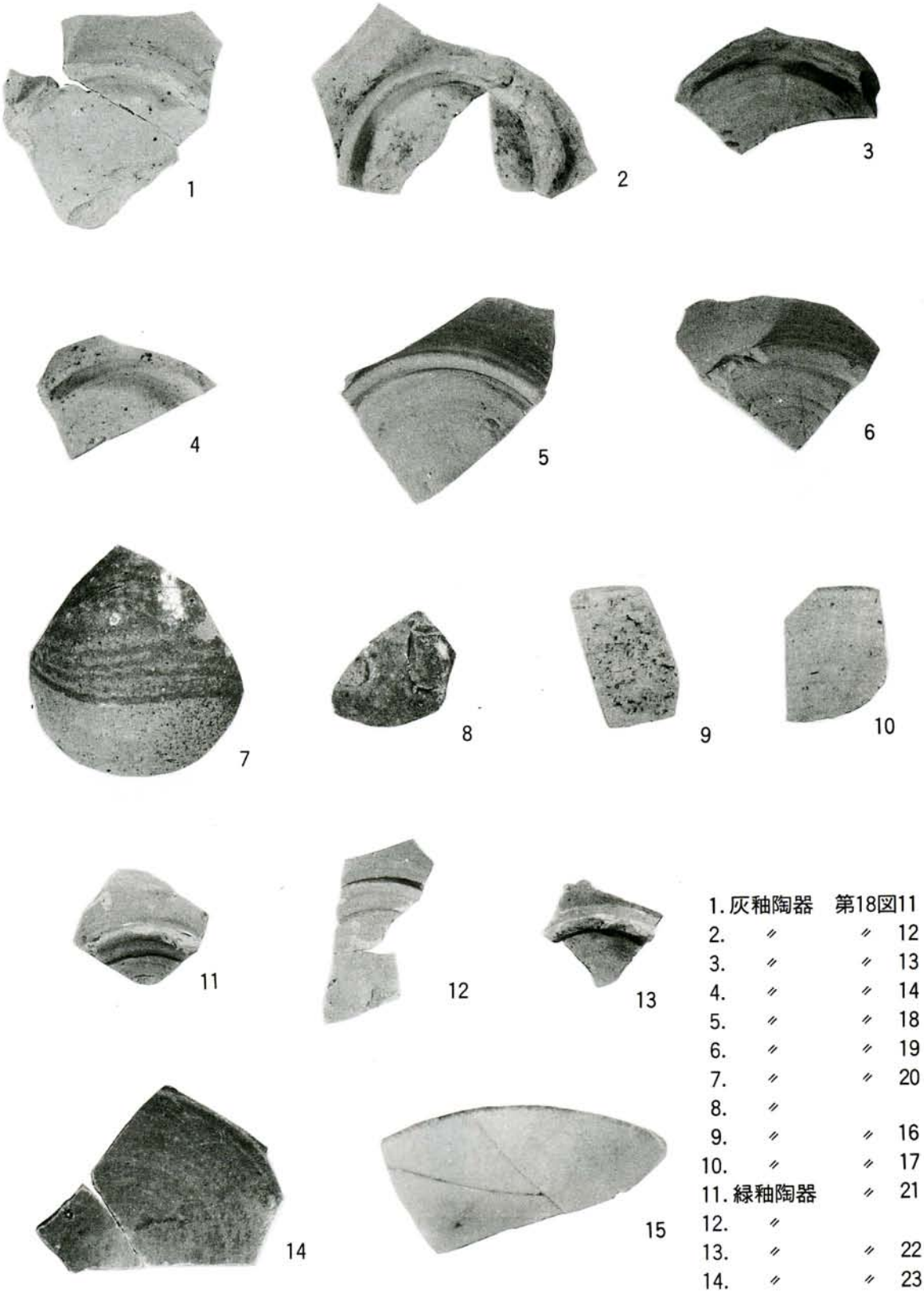
1.第19図 1　11.第19図14
2. 〃 2　12. 〃 17
3. 〃 3　13. 〃 15
4. 〃 4　14. 〃 16
5. 〃 5　15. 〃 18
6. 〃 6　16. 〃 9
7. 〃 7　17.第20図 7
8. 〃 8　18. 〃 9
9. 〃 11　19. 〃 10
10. 〃 12　20. 〃 8

図版19　出土瓦



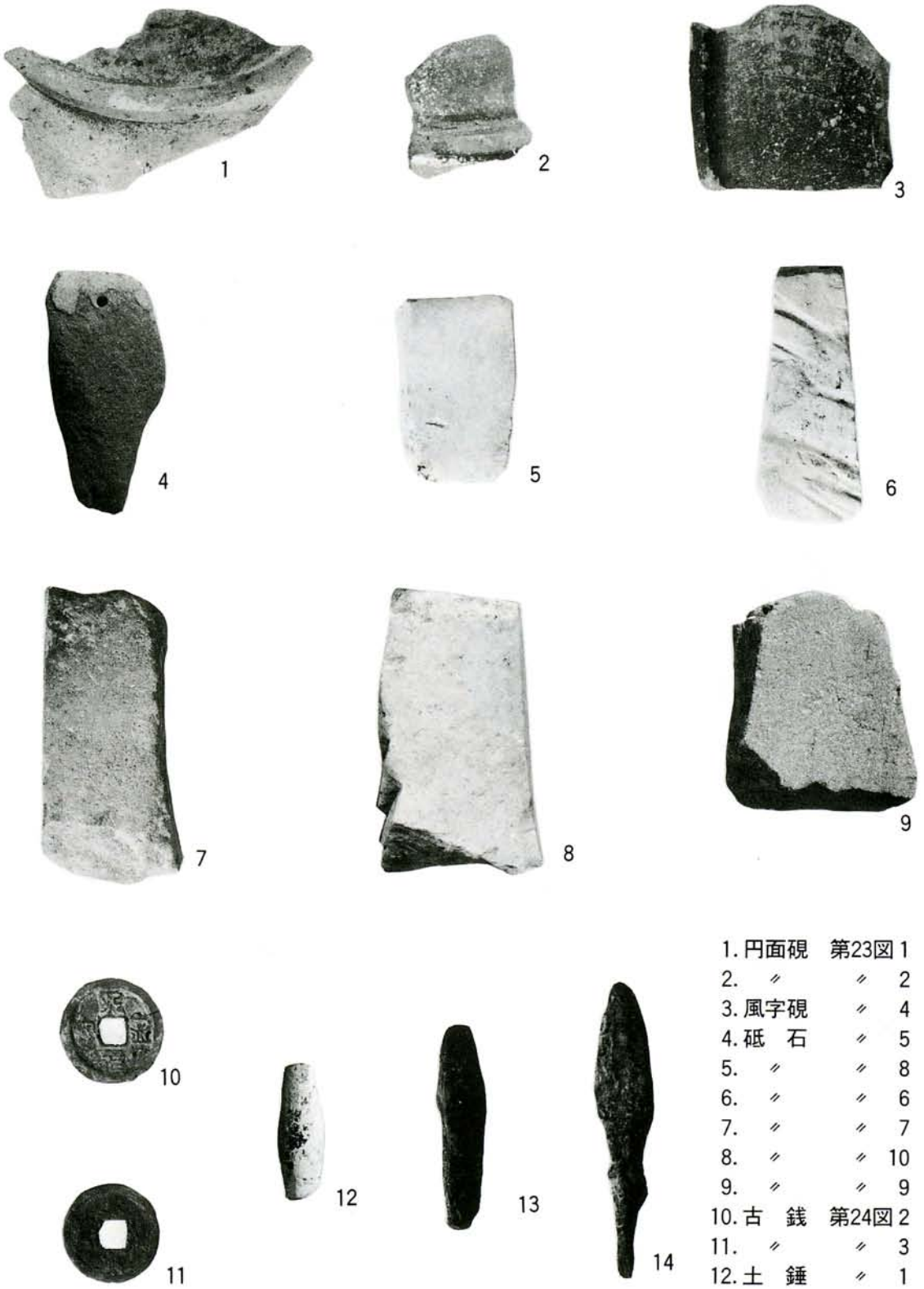
1. 第20図11
2. 〃 12
3. 〃 14
4. 〃 16
5. 第21図 1
6. 〃 2
7. 〃 11
8. 〃 14
9. 〃 15
10. 〃 16
11. 〃 17
12. 第21図18
13. 第22図14
14. 〃 12
15. 〃 13
16. 〃 15
17. 〃 16
18. 〃 17
19. 〃 18
20. 〃 2
21. 〃 3
22. 〃 5

図版20　出土瓦



1.	灰釉陶器	第18図	11
2.	〃	〃	12
3.	〃	〃	13
4.	〃	〃	14
5.	〃	〃	18
6.	〃	〃	19
7.	〃	〃	20
8.	〃		
9.	〃	〃	16
10.	〃	〃	17
11.	緑釉陶器	〃	21
12.	〃		
13.	〃	〃	22
14.	〃	〃	23
15.	白　磁	〃	24

図版21　灰釉・緑釉陶器、白磁



1. 円面硯	第23図	1
2. 〃	〃	2
3. 風字硯	〃	4
4. 砥　石	〃	5
5. 〃	〃	8
6. 〃	〃	6
7. 〃	〃	7
8. 〃	〃	10
9. 〃	〃	9
10. 古　銭	第24図	2
11. 〃	〃	3
12. 土　錘	〃	1
13. 鉄　鏃	〃	5
14. 〃	〃	4

図版22　硯、砥石、古銭、土錘、鉄鏃

多賀城市文化財調査報告書第4集

市川橋遺跡調査報告書

— 昭和57年度発掘調査報告 —

昭和58年3月31日発行

編集
発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
TEL（02236）8－1141

印刷　㈲工陽社
塩釜市尾島町8番7号